

よしあしに心をおかですめる江を

一葉にのりの人ぞたふこき

又、布袋の空を眺むる圖に讚して、

すみわたる心の月をいかなれば

空にながむる人ぞをかしき

悉く此れ禪味に富める相葩云ふべきものである。

直弼侯の逸話の二三を述べれば、一日清涼寺の書院にて茶話の時、英師庭前の松樹を指して曰く、彼の老木は壽乎として千年の翠を湛ふ、卿彼の針葉の幾枚あるを知り玉ふやと、侯黙すること久しい。師曰く、將來國主と爲りて、國家を統御せんには、松葉の幾枚ある位の旨は一瞥知るを要すと、侯歡喜止むなく、禮拜して退かれたと云ふ。次に直弼侯は茶を好み、且つ其の道にも精しかつたものらしい。

英師退院の後も、時々茶器を携へて久昌寺に來り、又自邸にも請じて茶を献ぜられた。然れども英師は、茶事には疎かつた。一日爐底にいと見事に炭を副へられたが、此の時所謂お炭拜見とて、之を譽むるのが當然なるに、英師曰く、「餘り炭が多くて無細工では御座らぬか」と、これには侯も覺えず失笑されたといふ。それから尊王攘夷の論の世に喧まじき時であつたが、或年直弼侯は江戸に下られし前、豫じめ自己の位牌を建て、出發されたといふ。かゝる大決心の生ぜしものも、畢竟英師參禪の賜に相違ない。英師は直弼侯に袈裟及び血脉をも授け其の血脉を授くる時に、左の血脉讚を作りて附せられたと云ふ。

血脉讚

血脉讚

佛々血脉、祖々肝腸、獨尊慧命、至聖道場、羽生飯處、  
含靈本郷、心身現在、相好著明、大意的々、體露堂々、

一面三世、箇裡十方、正法符信、永代紀綱、嫡々傳妙、  
燈々聯光、通過現未、貫已今當、高下平等、始終眞常、

恒沙經教、八萬四千、周圓重疊、叵罄讚揚、

嘉永五年、米船渡來の報傳はるや、直弼侯は幕府の内命を受け、急に旅装を調へて發せんとしたが、偶ま病起りて發することが出来ない。よく米船が東來するや、從來の態度と異りて大に殺氣を含み、イザと云はば戦端を開き兼ねまじき勢であるので、江戸の人心大に動搖した。直弼侯邦家の前途を思ひて衷心より憂慮に堪へず、病尊中に一書を仙英に送つて密に詢るところがあつた。其書に曰く、

大亂書よみかへし不申、御察讀可被下候、秘書に付、御一覽後早々御投火希上候、遠々敷打過候、殊之外大暑に候處、愈々御別條無く、珍重の事に候、小子事も、先比無滞着城致候處、相州海へ異船渡來に付、俄に出府被仰出、去る十七日爰許發足之積に候處、其以前より中暑、其上持病疝痛強く指引致し、何分長途之旅行難致、無據延引養生致居、少々にても快方に候得ば、發足致候心得に候、何分今以耽と不致困り居候且又此間異船は退帆致候得ども、御用筋有之に付、其儘出府致候被仰出、此度の異船は、是迄とは何か形勢變り、已に異變にも可及之處、先々無事に退帆致、此度之處は宣く候得共、又々當年中か來年夏か可參由申置候趣にて、以後之處誠に一大事に有之、於江府も殊之外御案思、諸役方大心配之由、左も有之事に候、右之御評議等有之旁出府被仰付候事相見え實以此度之出府は大心配之事、天下之御大事に拘り、愚昧にては不都合出來可申哉と、深く心痛致居候、御憐察可給候、扱夫に付、外ならぬ大和尚之義に付、愚意を申述候、扱異船近年渡來繁く、是が爲に神國之疲弊筆紙に難盡候

次第、別て當家杯は、平日莫大之物入之上、此度如き臨時跡先を不顧用辨致候様に成、行々の所軍役も見、良民の撫育も行届兼候様不成哉、甚以見通し惡敷事、公儀を始他家とても同様之義、實に數ヶ敷事、終には内亂之基、此度杯もわづか之日數さへ大に人氣立、江府大混雜之様子、久々之御治世故、是も無據次第は乍申、實は平日之心懸なき故と歎息致候、兎に角天下に事なかれ、穩に致度、古も神風異船を破沈候例も有之、今こて神力佛力之御加護等の事は候まゝ、只々以後異船之渡來無之様、祈念致候より外無之、大和尚には御道德格別之事、御法務之間々右之御祈禱竊に被成下候義は成間敷哉、是も小子より表立願候様にては、却て世間も如何に付、大和尚之御了簡を以、竊に御祈禱希上度候、尤武門之上にて申候得ば、幾度渡來候ても、恐るるに不足、御手當向此上十分に整候様申度心得に候、然し前文之次第にて、内實之處一度參り候得ば

一度丈々日本之疲弊と相成終には内亂之基、後年之處深く慮り候得は、只々異人共何か故障等出來、又は海上荒吹候か、何か障り等出來ること、所詮渡來無之候得ば、先々世上も穩にて、上下安喜の思を致し、人氣も猶□し（一字不明）天下太平に歸し候道理、先以此後渡來無之様、未前を防ぎ候事肝要之事、是病根かと存候、此義神佛之力に無之ては難致成就候間、小子も信心致居候、何卒大和尚にも、何か尊き御修法被下候様願度、篤と御勘考御返事希上候、右等竊に希上候、病中亂筆を以如此に候、何卒出立前一度參詣いたし、拜顔致度候得共只今取究申難く候、其内可申進候、穴賢、

秋 た つ 日

柳王舎主人

清 涼 寺

大 和 尙

玉机下

追て此菓子箱到來之品、ついでながら進上候、大暑折角御自愛專一に候、

一、此度渡來之異船は、北アメリカ國上より使節之趣、軍船四艘渡來に候、願筋之趣は、此方へは耽と相分り不申、何れ難題ケ間敷事と存候、御返答如何成御評議六ヶ敷事に候、吳々心配致候、又々委敷事は跡より申上候、以上、

二日の後、仙英之に答へて曰く、初に『嘉永六丑七月朔日、御書にて被仰越義に付、御答左之通、御賄方より差上貫候』とあり、

御金章及御菓子謹で頂戴、難有拜領仕候、如尊命嚴暑之節、寶殿閣下益々御機嫌克被遊御座、恐悅之至奉敬賀候、右御請御窺爲申上度捧卓墨候、餘情は參庭御伺申上度、若斯御座候、恐惶誠水謹言、

七月三日

仙 英(花押)

御祕書御請御伺申上候

異國來船に付御下向之御嚴命被爲蒙仰候處、前角より御小惱被爲在候て、御發駕御延引被遊候御様子、時候柄殊に御配慮被思召不一方御儀、何共奉恐入候、何れ極御快氣御下向奉專祈候伏て陳者御内命被仰聞候異國來船降伏之祈念□□(二字不明)勤修之之義畏奉承知候、抑佛道之秘術密法之降伏一切大魔最勝成就と申候は、御前先年御修終被遊三關六轉語之外別に無御座候、凡王道神道佛道儒道惣て世間萬億之秘密法修行と申所は、悉皆極中極に至候ては安心脫生死大丈夫より外更に無之事々奉存候、其外の權謀秘術に至る、右の技派餘流と、三界世尊高説に御座候、他門は不存候得共、吾一宗愚叟始諸僧侶右之修法仕一日も相缺不申、乍恐蒙寶祚長久御綸旨、國家安全天下泰平、可奉祈之御勅詔、日々無懈御修行仕來候、依右和尙分上平生不斷に守其意候、經曰、修業第一義者

佛菩薩照征諸天守護に御座候、此段恐無御疑御信心被遊候得ば、則御功德感應隨所現前と存奉候、猶以愚叟義も、無油斷時々刻々平生より格別に勤修精進仕候間、何卒於御前御勇猛信心御健勝堅固御武運長久、爲國人專精御祈禱奉希上所に御座候、若如斯之御信心に不敬降不隨伏之國民は、皆是天魔異類之流屬終離佛天之冥加、忽墮無間之苦域事に候、所謂謀計は雖爲眼前之利潤、終當神明之罰申神托不可疑、依不來之記證御伺如此に御座候、宜く御海容奉仰候、恐々多罪々々誠惶謹言、

比丘仙英叟

(花押)

上

直弼此書を以て反復熟讀するもの果して幾回なりしぞ。翌年正月米使べり

約を履みて再び江戸灣に入るや、一日幕府遽に徳川齊昭及直弼等を召して其の處置を議せしめた。直弼は開港論を主張して齊昭と大に論争した。幕府は専ら直弼の意見に従ひ、平和の談判を重ねて和親條約を締結し、米船は無事に退帆したのである。同じく安政三年米國總領事ハリス來りて、兩國互に都下に公使を置くこと、兩國民自由に交易を營むことの二大綱を提げて新に條約の締結を迫るや、國論大に沸騰して、開鎖の是非紛々たるものがあつた。其の中に獨り直弼は開港説を立てゝ動かない。然れども調印斷行の後、國論又一層の激切を加へ、其極直弼は櫻田門外に於て白刃に仆るゝに到つたのである。吁、胡元の亂に當りて斷々乎として戰を主張し、邦家を泰山の安きに置きしは北條時宗の禪定力であつた。世界を風靡せる泰西の文明に對し、斷々乎として和を主とし、以て皇室の寶土を維持せしものは直弼の禪定力である。而して其裏面には時宗に祖元あり

直弼に仙英あり、實に禪宗史上の一大快事と云はざるを得ない。

### 二三 乃木將軍と南天棒

乃木將軍

乃木將軍が禪に参じたと言つても、別に某會の會員と云ふにあらず又某會に出席せられしと言ふでもない。自ら一度も参禪のことを吹聴せられたこともない。碧巖録や無門關を懐に入れて禪を銜ふ人々とは全くその趣きを異にして居たので、大將が参禪されたと言ふことなどは知つて居る人は少い、然し乃木將軍が南天棒中原鄧州和尚について参禪されたことは、事實であるやうだ。明治二十八年八月十五日市ヶ谷藥王寺前の兒玉大將の邸で會見したのが將軍と南天棒の初相見であると云ふ。其の時に將軍は佩劍を前に出して、

「禪師よ、吾等は軍人にして、佛道を修業して居る用がない。何うか私の爲に此

の劍を以て説法せよ」

と云つた。時に奇行に富んだ南天棒和尚は其の劍を取り、

「納は出家兒ぢやから劍は無用だ、然るに貴殿は今此の劍を如何に活用せんとす

る、サア云へ、サア言へ」

するとさすがは將軍、

「それでは宜しく御説法を願ひたい」

と云ひ、南天棒から無字の公案を授かつた。後兒玉將軍は洋行し、乃木將軍は仙臺第二師團に轉ぜられたが、其時南天棒老師もまた松島瑞巖寺に移董されしに付き、將軍は又々老師の室に参じ、遂に無字の公案を透過したのである。其内について、趙州露刃劍の則に参じ大に得るところあり、爾來同則を拈提し來つた。日清の戦争にも、日露の戦争にも皆此の露刃劍を以て起たれたのである。猶ほ自

乃木將軍と南天棒

双される半月前將軍は夫人に命じて清淨なる帷子を裁縫し、小包にして南天棒に送つたと云ふ『大悟一番』に南天棒和尚は次のやうに將軍のこゝを述べて居る。

納は明治二十四年七年本山の命に依つて松島瑞巖寺へ轉錫した。大將は二十八年四月佐久間大將の後を襲うて第二師團長として仙臺に赴任された。そこで日曜休日などには仙臺から松島まで通つて、參禪を續けられた。時には母堂を伴はれ或は二愛兒を連れ、納の許に来て精進料理を望み、終日遊んで行つたことなどもあつた。二十九年の秋と思ふが、大將は第二師團から臺灣總督府に轉ぜらるるや赴任前二兒を連れて納の寺に參り、今度は命令に依りて赴任するので其の暇乞ひにやつて來た。どうか此の二人の男子にも武士の心得になる禪話を聞かして貰ひたい』と云ふこゝであつた。仍つて納は二兒に懇々と修禪の法を説いてやつた。日露戦役に際し、大將が征途に上らるゝや遺骨三つ揃はずば葬式を營むべからず

と言はれたのは實際ぢや。是等は實に禪に參じた大丈夫でなければ出來ぬ業である。納が乃木家を訪ねて二令息の弔辭を述べた時は、夫人は二人の遺骨はまだ其儘にしてあると言はれて居た。其の後に大將が凱旋されたから、納は祝賀の意を表して大將邸を訪問した。すると大將も夫人も大喜びされて『實はまだ子供等の遺骨は、彼の地から送つたまま繩も解かずにある』と云ふので、納は二個の包を取り、繩を解き、遺骨を出してやつた。其時座にあつたのは大將と夫人と納の三人であつたが、互に隻語をも發しなかつた。納は二令息の遺骨を机の上に据ゑ、讀經し引導もしてやつた。明治四十四年攝河地方大演習の舉行された半月程前、大將は西の宮の納の小坊を訪ねた。仍つて納は問うた『何處から來た』大將曰く、『山の方から』納曰く『どつちの山から來た』大將曰く『甲山の方から來た』納問ふ『何しに來た』大將曰く『演習があるから地理を調べに來た』踰えて十一月

皇太子殿下（今の陛下）の供奉で下向された時も、一日の暇を利用して納を訪ねて呉れた。此の時なども勳章は皆取除き平服であつた。大將は公私の別を正しくされたところは、常人の企て及ぶところではない。師團にあれ、學習院にあれ、自分の用事は必ず自分の紙墨を用ひ、決して官物を使用せられない。懷中には巻紙封筒墨池を携へ、又納の室に入れば必ず弟子の禮を執つた。自刃の前年であつたが、わざ／＼納を海清寺に訪はれた。納は久しぶりで隠寮で白鷹を一盃やつた。談笑數時間、何時になく愉快氣に見え、庭の掃除の行き届いた事など褒め、殊に納の健康をひどく悦んで居られた。談、たま／＼楠正成のことに及び、正成はどの者が討死の前に生死の事をわざ／＼廣嚴寺の楚俊に聞くなどには如何にも私には受取れぬと云ふ。それで納は云つた。果然々々、閣下にしてこの言ある當に其分なるべし、何故なれば閣下は數度生死の間に立つて實驗されて居るのぢや。然し尋常生死のことは透脱中々容易でない。百丈は馬祖にひこ／＼鼻を拈られて所知を忘じたが、後再參して一喝三日耳聾するここあり、楠公も關山國師について平生やつて居たが、まだ一寸竹膜を隔てたものがあつたらしい。然かも此の世の思ひ出にとて道を問ふのは、むしろその餘裕のあることを賞めんければならぬ、彼も明極の一喝にあつて白汗踵に至つた』かう納が云つたら大將も『我は老師に初相見の時、忠義の上に生死なしと云はれたのにひどく感激した。其の後露双劍の則で、數十年鍊つても矢張り忠義の上に生死なしぢや。私は露双劍は忠君の天地一枚ちやと思ふ。おかけて生死には迷はぬつもりぢや』と一笑されてあつた。この決心が自刃の上にあらはれたものであらう。それでなければあれだけの立派な最期は出来るものぢやない。

是れに依つて思ふに將軍は常に僧侶は嫌つて居られたやうであるが南天棒和尚



古武士の禪機

1101

だけは特別であつたであらう。即ち將軍は墮落した坊主や腐敗した宗教を嫌はれたゞけで、眞の宗教、眞の坊主は嫌つて居られぬ。將軍のやり方はすべて赤裸々露堂々であつた。實に將軍の如きは鎌倉時代の武將にも劣らぬ武士道を全うされた人である。吾人をして云はしむれば、武士が武士道を全うするは、とりもなほさず武士道禪であると思ふ。その乃木將軍の禪機に富んだ詩は、別項『禪機と軍機と商機』の中に引用して置いた筈である。

二四 廣瀨中佐の最後

廣瀨中佐

身を殺して仁を成したのは廣瀨中佐である。何人も知る如く中佐は一部下の杉野兵曹を救ふべくして遂に身を殺したのである。此の勇氣と此の仁義とは、一朝一夕の修養では出来るものでない。心身を惜まざる平生の修養が與つて力がある

正氣の歌

のである。中佐は軍務の餘暇には、常に鎌倉に赴いて禪を修したと傳へられてゐる。されば中佐の精神生活は矢張り其の糧を禪より得てゐると云ふも不可たからう。而してその精神生活の根柢には、不惜身命の大道念が含んでゐた。故に中佐は正氣の歌を作つて曰く、

嗚呼正氣畢意在ニ誠字、  
嗚々何必要ニ多言、

誠哉誠哉斃不レ已、  
七生ニ人間ニ報ニ國恩。

此の意氣があつたればこそあのやうなる壯烈の最期を遂げるこゝが出来たのである。即ち旅順の閉塞隊に加はり艦に上らんとして高唱して遣した辭世に、

七生報國 一死心堅、

再期ニ成効 含レ笑上レ船、

これは正に楠公を理想したものであるが、此の金剛不壞の大意志は現代武人の

廣瀨中佐の最後

1101

龜鑑ではないか。

## 禪將奇談

### 一 水戸義公と心越禪師

心越禪師は殊の外水戸義公の歸依を受けた人である。義公或は時禪師の定力を試みんて、さり氣なく禪師を其の邸に請じて、饗應をなし酒を進めて、

『杯小さくては興も薄い』

さて、やがて大杯を持ち出して禪師にすゝめた。そして禪師が將に波波とつぎたる大杯を唇の邊まで運ばんとする時、豫め用意して居た隣室の大砲を不意に發したが、禪師はそれを知らざるものゝ如く、平然として大杯を傾け盡した。其

の時義公は禪師に向ひ、

『客人に對し鹿忽の段誠に恐入る』

と懇に申譯をした。禪師は笑ひながら、

『イヤそれには及ばぬ。鐵砲を放つは武門の習ひであれば、少しも御遠慮には及び申さぬ』

さて一向氣にかける容子もない。

『さて今度は御返杯で御座る……』

さて義公に差した。公受取つて波々と盛り、まさに飲まんとする一刹那、禪師は天地も振ふばかりに、

『喝——』

と大喝一番した。その聲恰も雷の如くであつたので、公は思はず杯を取り落し、

『何をなさるぞ、戯事は無用にせられたい』  
と聊か慚然たるを捕へて、禪師は、

『棒喝は禪門の茶飯、恰も武門の鐵砲と同一で、斟酌するにも及ぶまい』  
と云はれた。此れより義公は益々禪師を信じ、參禪いよく努めた。

## 二 物外近藤勇を破る

拳骨和尚備後の物外かつて近藤勇門下の教十人を撃ち伏せし時、勇進んで一手を試みんことを乞うた。物外大に恐るゝ様にて地に伏し、

『先生は斯道の鬼神である、到底雲水僧の及ぶところにあらず、許し玉へ』  
と乞ふ。勇聽かず。依りて止むなく御器械を兩手に打つて立つ、勇曰く、

『凡そ武技を闘はずには皆其の器あり、和尚も竹刀或は木槍の内にて、その欲す

まこころを選ばるべし』

時に物外曰く、

『自分は僧侶であるから、武器は甚だ忌むところである。此の頭陀椀には澤山で御座る』

と云ふ、勇はその意外なるに呆れ、且つ怒り、一突に仆してやらんと睨んだ。然し物外和尚に寸隙もないので凡そ半時程睨んで居たが、やがて勇は隙を見出したものか、全身に力を込め岩石をも貫く勢にてヤツと突き付けた。物外の胸板は微塵に碎けたかと思ひの外、師はヒラリと身を轉し、直ちに兩の椀を以て槍の蛭巻を挟まれた。勇は之を外さんごすれども磐石の如くにしてチツとも動かぬ。勇は玉汗を流して有らん限りの力を盡すが、引くことも突くこともかなはぬ、物外は良久しくして雷の如き一喝を下すと共に椀を放された。勇は忽ち後に腰を突き

槍は其手を離れて三間も飛び去つた。これより物外即ち拳骨和尚の名聲は京洛中に轟き渡つた。勇も爾來高慢心を除きて物外に皈依し、就いて劍禪の極意を學んだ。

### 三 原坦山と某將校

某將校、會て原坦山を佛仙窩に訪ひ、入室せむことを請ふ。坦山一語をも發せず、イキナリ横面をポカリと食はした。某將校大に怒り、滿面朱を灑いで立つた。坦山カラくくと打ち笑ひ、

『ヤア怒つたく、貴公はサスガに軍人ぢやワイ、見所のある男だ、達磨宗の中間入りには、それ位でなけりやいかぬ』  
某將校大に感じ、その座で弟子の禮を執つて入室した。

### 四 伊藤公の赤面

故伊藤博文公、一日久我環溪を其の隠寮に訪ひ、久澗を謝した。環溪、伊藤公の素行治まらざるを知り、突如、彼に向つて云はく、

『どうぢやな貴公相變らずに見えるな、アツハツハツ』  
流石の伊藤公も此一間に逢つて一言なく、滿面紅を染めて頭を搔くのみであつた。

### 五 桐野利秋の獨々逸

桐野利秋、一日相國寺の獨園和尚に見え、

三千世界の烏を殺し

伊藤公の赤面 桐野利秋の獨々逸

主と添寝がして見たい

「云ふ歌を自慢して見せると、獨園和尚はニヤリと一笑し、桐野さん、そんな事を云うて居ては天下が取れませぬぞと云はれて、桐野はげんな顔付で、それはまた何うしたわけかと問ふ。和尚は言下に、乃公なら斯うだと、

三千世界の鳥と共に

主と添寝がして見たい

と云はれたので、桐野は如何にもと合點し、他日人に語つて、あの坊主は却々油斷のならぬ人だと云つた。

## 六 塚原ト傳の劍道奥儀

塚原ト傳は劍道の達人であることは前にも述べた。其の弟子の中に、最も劍道

の勝れたものがあつた。ト傳は之に其の奥儀を皆傳しようと思つて居た。ミこころがその弟子が、或時路傍に馬を繋いである傍を通つた。其の馬驚いて忽ち跳ね出して、其通行人を蹴ようとした。然し流石はト傳の弟子だけあつて、ヒラリと身を交はし、其の儘悠然として通り過ぎた。人々其の技量の程に感服せぬものは無かつた。然るにト傳は之を聞いて歎じて曰く、

『ア、餘程技が出来たと思つたが、まだ皆傳は出来ぬ』  
と、世人之を耳にして、大に驚いて、

『憎きは先生の言草である、先生とても馬に蹴られては、あれ程までに早業は出来まい、試みに先生の御手並を拜見しよう』

さて、ト傳の通る路傍に馬を繋いで置いた。そしてソレを物陰から様子如何に見て居ると、遠くの後方に身を避けて、而かも靜かに歩んだので馬は荒れんともせ

ト傳と馬

ず、卜傳は無事に通り過ぎることが出来た。其の後卜傳は、『馬は跳ねるものであることは決して忘れてはならぬ』と、其門人等に教へられたと云ふが、實に味ふべき逸話である。

### 七 峨山和尚軍人を冷遇す

天龍寺の故峨山和尚、曾て泉州堺の南宗寺に住した。時、偶また大阪師團の野外演習があり、阪路南宗寺を借りて宿こした。峨山、執事に命じて云ふやう、『野外演習は國家萬一の場合の準備にするのだから、これを優遇するは慈悲でない』と、執事、能く其意を體して將校兵卒悉く平等に湯茶を給せず、寺法なりとて麥飯に蔬菜を添へて出した。その他また凡て是に準じて冷遇を極めた。一將軍大に怒り、案内もなく峨山の室に入り、突つ立つたるまゝ、聲を勵まし、大に軍人の

峨山和尚

國家の精華なることを説いた。峨山、冷然、その語の終らざるに、

『それはお互さまよ』

と一語、顧みもしない。將官、杜口無語、啞然として室を去つた。

### 八 耶馬溪の奇蹟

禪海幼名は市九郎と呼び、越後高田の藩士福原勘太夫の一子であつた。故ありて父の勘氣を受け、江戸に至りて中川家に仕へて淺草に住して居た。後その主人中川四郎兵衛を殺害して出奔し、諸國を流浪し、享保十九年に九州は豊前宇佐八幡に詣り、其より南山に參拜し窟中の勝景を探りながら、一日耶馬溪の關門とも云ふべき樋口村に至り、有名なる嶮路鎖渡りと云ふを過ぎたが、道路が狹隘で河に臨み、而も岩腹懸崖道路危険で、甚だ往來するに困難である、やゝもすれば人

禪海

耶馬溪の奇蹟

馬誤りて河口に墜つるもの多しと聞き、市九郎此を見て慨然として大誓願を起し、發心出家して此鎖渡を開鑿せんと決心し、それより三十年の長年月、一意専心開鑿に従事して居つたが、一方江戸中川四郎兵衛の長男中川實之助は、父の殺害された時はまだ漸く三歳の嬰兒であつたが、長ずるに及んで此事を聞き、禪海の非道を怒り親の仇を打たんものと、十三歳にして柳生但馬守に従つて劍道を學び十八歳にして奥儀を極め、それより父の讐を尋ねて諸國を歴遊したが、禪海の所在を知ることが出来なかつた。遂に九州まで來り、一日宇佐八幡に參詣せしに、偶然にも禪海の所在を話す者があつたので、これこそ八幡大菩薩のお告げに相違あるまいと其人に厚く禮を述べ、二十年來の宿志今や達せりと喜び勇んで、樋口村さして馳せ來り、禪海に會ひ昔の非道を詰り、復讐を迫つた。

此時禪海は實之助に誓つて言ふには、予已に出家染衣の身となりて一生をこの開鑿の事業に抛つた所が、幸にして其功殆ど成らんとしてゐる、君願くは三年の命を假せよ、斯事業成就すれば謹んで君の意に従ふべしと。實之助も遂に其の至誠に感じ、父の讐を復することを緩うしたのみならず、却つて禪海に助力して事業を成就せしめた。乃ち禪海大に喜び、一週間の水陸勝會を修し、中川四郎兵衛の靈に供養したところが、實之助も亦初めて怨親平等の至誠に感じ、懇に暇を告げて江戸に歸り、親族に此狀を告げたので、一族も皆禪海が精神に感泣し、敢て一人怨みを云ふものがなくなつた。禪海かくも大願成就して中川家年來の憤怨を解くことが出来たのは、これ實に禪海の堅忍不拔の大意志と、難道開鑿の大工事を三十年間専心に身を挺して成就したる大勇猛心とに依つたものである。後に禪海は大僧正に進められ、安永三年甲午八月二十四日を以て耶馬溪の地に寂を示した。

九 雪潭犬山侯を叱す

雪潭

雪潭、諱は紹璞、雪潭は其の號である。俗姓は吉田氏、紀伊國の人である。十歳の時大泰寺桐岳に就いて得度した。其の慈恩寺の堂林に侍して、其の玄微を得たのである。伊深の正眼寺に住したが、慶應三年には、孝明天皇より眞如明覺禪師の徽號を賜つた。歿する時明治六年九月十八日、年七十有三であつた。或る時雪潭が大山瑞泉寺の請に應じて臨濟録を講じたことがある。犬山侯は即ち簾の中にあつて、聽講せられたが、雪潭は之を見るより、講座の上より大喝して曰く、『咄何者の無禮漢ぞ、他の講を聽くに當り、簾中にあるは何ぞや、此の雪潭の講座には糝糠はない、何ぞ篩を用ゆる要がある。若し其の篩を取り去らなければ、老衲斷じて講を開かず』

と。その聲恰も雷の如くである。座にあるもの皆互に顔を見合せて、何事か出来せずやと色を失つたが、侯は其れを聞いて、大にその非を悟り、其の罪を謝して禮を厚くし、講を聽き終つたと云ふ事である。其機鋒峭峻權貴に阿らざる常に此の如くであつた。然るに今日の俗僧の名聞利養權位に憧憬れるものは、大に慚死しなければなるまい。

一〇 環溪和尚の大酒

環溪

環溪和尚諱は密雲、環溪は其號である。俗姓は細谷氏、越後國西頸城郡名立町の人である。後從一位久我建通の養子となつて久我氏と稱した。甫めて十二歳の時、清涼寺堅光に就いて得度した。其の當時、興聖寺の回天の室内太だ盛んであると聞いて、環溪直に之に參じた。回天その大器なるを見ぬいて、常に惡辣の



手段を以て之に接したけれども環溪は些かも屈せず、充々として坐禪し、殆ど寢食を忘ずる程であつた。終に回天の法を嗣いで興聖寺の席を匡し、常に百餘の雲衲を接して、その法席の盛大なる事は、當時其の右に出づるものがなかつた。

教務省嘗て神佛宗を合して大教院を設立し、僧侶神官各々一人づつ交代に其の管長たらしめ、二教に關する事を行はしめた。たま／＼環溪輪番管長たる時、神官等が環溪を困めようとて、環溪に向つて難題を申出した。曰く、『神社の祭典を行ふ時に、僧侶が法衣を着て、珠數を爪ぐり、死したる烏魚を神に捧ぐるは、全く宜しくない。斯る場合には、僧侶も烏帽子を被り、直衣を着せるがよろしい』

と、環溪はそれを聞いて驚くと思つたら、少しも動ずる風は見えぬ。反つて之に賛成し、

『それは實に面白い、是非さうするがよい、然し神官も寺院に來た時は、髪をそりおろし、法衣を着けるが當然だ』

と云はれて、神官等は再び此の事を云はなかつたと云ふ。

環溪和尚、一日久我家を訪ねた。其時恰き陸軍の將校等が、五六人寄つてゐる。然かも酒酣であつたが、環溪和尚の來るや、皆大杯を舉げて之に囑した、和尚一々之を受けてまた之を酬いた。此の如くする事四五回滿醉皆飲むことが出來ない。環溪和尚之を見て哄笑一番して曰く『面前百萬の敵があつても、之を吞却する底の漢でなければ、英雄とは云はれぬ、然るに子等はそれしきの酒の爲に酔ふなどこは、實に男子として情ない話だ。此の弱蟲共めが、平生の修養を今少し神妙にしたらどうだ』と、恰も傍らに人なきが若くであつたと云ふ。

一一 川合清丸の參禪

川合清丸と鳥尾得庵

彼の川合清丸が初めて鳥尾得庵居士に參するに、『佛法は如何するものぞ』と問ふ、居士曰く『佛法は石鹼の如し』川合氏問ふ『是れ何の意ぞ』居士曰く『石鹼は人の垢を拭ふものなり、垢除けば石鹼に用なし、人に垢あるが故に石鹼の一日も缺くべからざるを知る。垢總べて拭ひ終る。是れ佛境界なり、佛境界の人何ぞ石鹼を要せむや。さて人には貪嗔痴等の病垢あり、故に佛法の入用なること知るべし』と。川合氏曰く、『予は少壯の頃より國家を憂ふること甚だ切なるが故に、少にして神道を學び、壯にして儒を學び、以て精神を鍛鍊すること久し、從て貪嗔痴等の妄想を起せしこと無し、然れば精神的に中流以下のものゝ爲めには、佛法も或は必要ならむも、予及び予以上の人の爲めには、佛教は不必要なるものぞ』

居士突然として曰く『君は何時生れて、今何處に在りや』と、川合氏曰く『予は嘉永三年に生れ、今現に先生の前にありて談話しつゝあるに非ずや』と、居士喝して曰く、『生れもせぬに生れたりと思ひ、居りもせぬに在りと思ふ、これ三毒の本源、無明の親玉なり、這の妄想あり、何ぞ三毒五欲の起らざることあらむ』と、爰に於て川合氏其の意の高遠にして、慮りがたきものあるを思惟し、初めて禪に參するに到つた。たれでも一時は斯うした誤解に陥りやすい。

一二 古梁魚肉を喰ふ

古梁俗姓は笹野氏、諱は岩峨、古梁は其の號である。相模國高坐郡八王子に生れた。幼少の折江戸東禪寺の萬庵和尚に就て得度した。後、仙臺伊達侯の歸依に依つて、瑞鳳、瑞巖、覺範等の寺に住した。

古梁魚肉を喰ふ

古梁天質聰敏にして、中々膽力があつた。其の十二歳の時、仙臺の伊達侯、其父侯の法要を修むる爲めに、東禪寺に詣で、書院に入つて休まれた。其の時の茶給侍は古梁である。古梁が茶を捧げて侯に呈したので、侯が之を取らうとして誤つて茶碗を落した。茶沫飛んで侯の袴を汚したので、侯は大に怒り刀を握り、古梁を斬らんとした。古梁其の罪を謝すること甚だ至れりと雖も許さない。古梁侯のすでに許さざるを見て、直に進んで侯の前に首をさし延べて曰く、

『サアお斬り下さい』

とて少しも騒ぐ色がない。此の有様を見た侯は、其の法器なるを知つて、遂に仙臺の瑞鳳寺に送つて、資を與へて學ばしめた。此に於て古梁はよく内外の典を究め、一代の宗師となることを得た。

古梁、瑞巖寺に住持した時聞くが、或る時土地の豪族某が供養せんとて古梁

を招いたことがある。其の時古梁の外にも、澤山の僧侶が其席に列した。某の性至つて奇行を好み、會する處の僧等を愚弄せんじて、饗する處のものは皆悉く魚肉であつた。

『喰ふか喰はぬか』

と私かに見て居ると、古梁は平然として頻りに喰つてゐる。而も

『實に結構ぢや、誠に口に適した……』

と言葉を盡して譽める。其の態度、自分が現に喰つてゐるものが、魚肉か何か一向頓着がない、處が他の僧等は少しも口にしない。而かも私かに古梁の袖を引いて、

『禪師、それは皆魚肉であつて、出家の口にすべきものではない、チト御注意召されては如何……』

と云ふ。するに古梁はつくづく、その僧の面を見て、  
『へエ此れは魚肉かえ、尊公はよく知つてゐるねい』  
と、その僧ぐつと行きつまり、一言もなかつたと云ふ。

### 一三 徳川家康の負戦

古來から英雄とか豪傑とか稱せられる人は、多くはその晩年に及んでから十分を求め、希望を充たさうとした爲めに、却つて短命に終つたり、又は淺間しい最期を遂げ、さもなければ、自分一代限りで跡を絶やすやうな有様になつてゐる。然るに唯一人、決して物事を十分にしなかつたのは徳川家康である。家康は元來不運な人で、家が極めて不運な時に生れた故、育つに従つて益々情ない有様であつて、初め今川義元の爲めに、生擒同様に静岡へ預けられ、意に満たぬ妻までも

徳川家康

授けられた。即ち築山御前であるが、好色の上に嫉妬深いと云ふのであるから、實に手がつけられぬ。遂に此の女の爲めに岡崎の大樹寺で腹を切つて死なうとしたのは十九歳の時である。この時は幸に登譽上人に諫められて果さなかつたが爾來四十幾回の戦ひ、一生涯の間に曾て一度も勝つたこゝがない。何處へ行つても敗戦、何をしても不十分不満足な人であつた。一例を云へば、大高城の戦ひに今一息で城が陥ると云ふ時に當り、家康自ら號令を下して急に軍を引かせたのである。其時本多平八郎は非常に怒り、

『何故あんな事をされるのだ。今一息に城は落ちるのに』  
と云つた。家康公は笑つて、

『それは承知の上だ、あの城を落さうと思へば、貴様達のやうな立派な臣を討死させねばならぬ。城一つの爲めに、大切な忠臣の生命には代へられぬワイ』

と云ふので、本多は此時思はず聲を放ちて泣いたと云ふ。さう云ふ風に、始終不十分に不十分を重ねて、遂に天下はいよいよ家康公自身の手に落ちた時には、二代將軍に世を譲つて、自分は將軍であると云つて江戸城に居られたことはなく、静岡へ隠居してしまはれたのである。家康の遺訓に、

『及ばざるは尙ほ過ぎたるに勝れり』

と云ふ有名な句がある。支那の孔子は、

『過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し』

と云はれたが家康公の方が數段と上である。及ばざるは尙ほ過ぎたるに勝れりとは、古今を通じて家康公の外に云つた人は無いやうである。實に武將としての金言である。

一四 杉本九十郎の強膽

杉本九十郎

室鳩巢の『駿臺雜話』中の物語である。『加賀國に杉本何某とて、ひとりの微賤の士あり、その子九十郎と云ふもの、十五歳の時、父あづまへ行役したるに、其のあとに年輩同じ程なる近隣の人の子と、圍碁の上にて口論したるに、九十郎こらへ得ず、刀を抜いて相手を一太刀きりしを、かたへの人に抑へられけり、さてその事、廳に達した後、相手の創療治さすべしとの事にて、其間九十郎は官長の家に預り置きしに、聊か臆したる氣色もなく、言語振舞の落ちつきたるは、なか／＼年に似合はぬやうに見えたり。日を経て相手終に創に果てけるにぞ、九十郎も切腹するに議定しける、その前の夜、主人名残りををしみつゝ、酒肴いろ／＼用意してもてなしけり、九十郎は母への文など認め置き、さて主人にくはし

く謝詞を陳べ、此程付き居たる家人へもそれぞれ懇ろに暇乞ひして、さて言ひけるに、

『面面へ名残も惜しく候へば、今宵は明くるまでも語りたく候へども、明日切腹の時、ねむたく候ては、如何と存じ候へば、先に臥せり候べし、面々はこれにてゆるく酒すゝめられ候へ』

とて奥へ入るかとするれば、やがて高躰して寝ぬるを聞いて、跡に居たりし人々感じあひけりとぞ。又次の日つこめてよき程に起き出でて沐浴し、衣服改めつゝ、用意心静かにし、その後切腹の席へ出でて、檢使に一禮し、こゝろよく切腹しぬその有様従容としてやすらかなり。如何なる勇烈老功の士たりといへども、是れに過ぐまじき思ひきこて、その場に有り合はし人々、年を経て後までも語り出して、涙落さぬはなし』とある。切腹する際に居眠りする馬鹿があるか云ふ者

もあるか知らぬが、切腹の際に居眠りでも爲し得る度胸を有するものにして始めて斯う云へるのである。僅か十五歳の少年にして、死を視ること歸するが如くである。彈丸一發頭上をかすめて過ぎても、膽を冷やす現代の軍人には誠に頂門の一針であると感じず。

一五 大雅堂の逸話

「先哲叢談」の中に、祇園南海が宋の沈無名の畫譜を大雅に與へた所が、大雅は非常に喜んで、遂に其の風趣を感得したので、此時に無名と改むるに至つたと記してあるけれども、佩文齋畫譜を調べるに、宋に沈無名と云ふ者は無い様子である。そこで少し怪しくなつてきたが小田梅仙の云ふ所に依れば、「曾て兼葭堂に於て、大雅が學んだといふ蕭尺木の太平三山の圖を觀るに、それには蕭氏の自跋が

あつて、大雅堂の書體と頗る能く似て居るから、南海が貽つたと傳ふる所のものは、恐らく此れではあるまいか」云ふ。さうすれば先哲叢談の所傳は一層覺束なくなつてくるが、兎に角これは他日の研究考證の一材料であらうと思ふ。

○ 或る書肆の僕が遊蕩で、折々主人の金を誤間化しては浪費する。それが露見して到頭逐はれることになつたが、平生大雅は懇意の仲であつたものゝ見えて、別れを惜しみにやつて來た。段々事情を問うてみると如何にも僕が宜しくない。然し役に立つ人間一人をむざ／＼と棄てるには忍びないといふので、大雅は所藏の書畫や什器を賣り拂つて、費消した金高を償つてやり、而かも相伴つて主人の許に赴き、共共罪を謝した上に僕を復讐せしめてやつたといふ。此の如き同情心義俠心に富める一事は、確に彼の性格の一面を窺ふに足りる。

○ 大雅は常に石刻の十三經を欲しいと思つてゐたので、僅かづゝの金を貯へてゐたのが、遂に積つて百貫になつた。そこで書肆へ出掛けて行つて交渉してみたがそんなことでは賣れないと云ふので相手にして呉れぬ。大雅は大息之を久しうしてゐたが、遂に其の貯金百貫は之を祇園の祠に獻じてしまつた。

○ 大雅は、毎夜開け放して寝てゐた人である。或晩盜賊が入つて、青氈の上に散亂してゐた書畫の中から、何か竊に待ち去らうとした。此物音に目を覺した大雅が「オイ／＼まだ外にもつと持つてゆく物はあるぞ、此の青氈だけは大切にしている商賣道具だから持つてゆかれては困るが外のものなら何でも欲しいものを持つてゆくがよい」と云つて盜賊を呼び返したといふ話がある。これは彼が如何に

豪放恬淡であつたかを知るべき逸事である。

○

大雅が漢畫を學んでゐた最中の事である。彼は數十本の扇子へ自ら畫を描いたのを持ち歩いて、美濃尾張近江あたりを賣つてみたが、一向誰も買つて呉れる者が無いので、歎息して歸つてくる途すがら、瀬田の橋を渡つた。其時獨語して云ふには、『斯んなことをしてゐたのではダメだ、扇子の沽れないのも天命であらう一層これは斯うしてしまはう』と、持つてゐた扇子を悉く湖に投じて、『聊か龍王を祭る』と云ひ置いて去つた。これより大雅の名聲は、遽に振ふに至つたといふ。

○

大雅が浪華にゐた當時、土地の大和屋某といふのが、自家の暖簾を書いて貰は

うと思つて依頼した。大雅は早速筆を執つて大和……といふ二字だけ書いたかと思ふに、筆を擱いて坐を立つたので、主人は便所にでも行つたことばかり思つてゐたが、待てど暮せど戻つて來ない。それから大騒ぎになつて、人を出して尋ねさせたりしてゐると、五六日経つて何處からこもなくブラリ歸つて來た。主人が怪しんで訊くに、『此間お宅の暖簾を頼まれた時大和の二字を書くに恰ど芳野の花が見頃であらうと思つてもう矢も楯も堪らず、一寸行つて來ましたが誠に御心配をかけて済みませんでした。未だ一字残つてゐたはずですから書きませう』とそれから屋の字を追書したといふ。

○

京都の東山に稻荷大明神を祭る一神社がある。會て講中の人々が相談して幟を新調して其の社前に樹てようと思ひ、當時令名噴々たる大雅の許へ行つて揮毫を



頼んだ。大雅は早速承諾して明神の社内へ赴いてみるに、何しろ幅五反に長さ二丈といふ大職なので、大雅も暫く考へてゐたが、やがて筆を執つて一字だけ大きく書いた。傍で之を見てゐた講中の人々は感服して見てゐると、大雅は突然筆を擱いて、『一體潤筆料は幾何ですか』と問ねた。これには一同も驚いて、既に一字でも書いた上は、職が汚れてしまつたのであるから、先方の請求通りに與へねばなるまいと思ひ、『何程でも仰の通りの謝儀を差し上げたいと存じます』といふので、大雅は『然らば百兩申し受けたい、若しそれが御不承知ならば御免を蒙る』と申入れた。人々も是非なく其の約束で頼むと、大雅は喜んで盡く見事に書き了り、飄然として何處ともなく立ち去つてしまつたので、講中の誰彼は、大雅の卑陋を憤り、斯ういふ汚れた職は奉納するここが出来ぬから引き裂いてしまはうとすると、此時大雅が慌たゞしく駆け戻つて来て云ふには、『私が此間三條通り

を歩いた節、フト或る骨董店に古茶鑑が列べてあつたのを見て、急に之が欲しくなり、買はうと思つて價を訊くに百兩だといふ、私は元來の貧書生でもあり、到底百兩などといふ大金はおろか、明日食ふ米にさへ、不自由をする身の上であるから、欲しいには欲しいが買ふことが出来ず、其時は残念ながら歸つて来たけれども、何にかして買ひたいものだといふ念慮は頭を去さないでゐる折柄、幸にも今日は職を書いて呉れといふ依頼を受けたので、今日こそは百兩の謝儀を貰つて、日頃の希望を達しようと思ひ、百兩の禮金を頂きたいと申したのであつたが其の百兩を持つて早速骨董店へ行つてみると、主人が云ふには、ツイ今し方一足違ひで其の古鑑は賣れてしまつたに聞き、實に呆然としてしまつたほどである。自分の卑劣をも忘れて百兩の大金を食つたのも、全く其の古鑑が欲しかつたばかりであつたのに、一足違ひ位で他人の手に入つたと聞いては、大雅終生の恨みで

あるが、これも是非がない。然し其うなれば最早や此の百兩も無用になつたわけであるから、お返し申さうと思つて引き返して來たのである』と述べたので、講中の人々も始めて大雅の眞意を了解し、強ひて其の百兩を大雅に贈つたといふことである。

ところが此の事が早くも遠近に知れ渡つたので、有名なる大雅堂先生の揮毫した大幟を見ようといふので日々續々として稻荷の社前には人山を築くやうになつた。大雅も餘儀なく百兩は受取つたが、如何にも心苦しくてならない。どうかして此の金を稻荷神社の爲に使ひたいと心掛け、遂に田舎漢に變装して、見物人の中に混つて、人々の批評を聞くことにした。すると彼の字は小さいとか、何の字は鈍いとか曲つてゐるゝか、品が無いとか、多少の非難を耳にしたので、大雅は早速其晩に同じ幟を書き改めて、翌日之を立てて出した。斯うして四五度も書き

直す中に、見物人は一齊に感歎して、最早や非難を打つ者もなくなつたので、大雅も漸く安堵の思ひをしたといふが、其の爲、折角の百兩は、盡く之に消費してしまひ、一文も己れの爲に使用しなかつたさうである。そして其の最後に書き改めた大幟は、今日も猶ほ稻荷社の寶物にして永く社庫に珍藏してあるといふ。

○

或人が大雅堂を訪ねて、清談雅話の末、遂に其夜は一泊することにしたが、立派な夜具蒲團を出して敷き與へたけれども、襟のあたりに垢のついてゐるのは、折々泊り客でもあることと思ひ、何氣なく寢てしまつたが、夜中になつて廁へ行かうと思ひ、起きてはみたが、勝手がわからないので、主人を呼び起して案内を頼むと、大雅は寢衣のままで毛氈の下から這ひ出したので、友人は今更ながら氣の毒に思ひ、さては夜具の餘分が無いので、自分の夜具を貸してくれたのであつ

たかと解り、非常に氣の毒に感じ、それにしても細君は？と訊ねると、妻の玉淵は諸方から依頼された澤山の唐紙の中から出て来たといふ。

下篇 止啼錢

活殺自在の妙機

一 大自在を得たる人

把住と  
放行

禪宗では能く把住と放行と云ふことを述べる。把住とは取止めると云ふ事で、之を宥さない方を言ふので、放行は放ち行ふで讀んで字の如く宥す方を云ふのである。是れは禪の應用の圓轉自在なることを形容したもので、禪宗でよく殺活自在の妙機だとか、收あり放ありだとか、殺佛活佛など云ふのは、皆同一道理を述べたものに過ぎない。何でも一方に偏すれば片手落ちとなり、不公平になつ

大自在を得たる人

て仕舞ふ。何事でも把住はぢゆうを放行はうぎやうとは兩立りやうりつして行かなければならぬ。放行はうぎやうの處ところに把住はぢゆうがなければならず、把住はぢゆうのところに放行はうぎやうの道理だうりが具そなはなければならぬ。人ひとを使つかふ場合ばあひも矢張りさうである。無闇むやみに人ひとを叱しかるばかりでも、また無闇むやみに人ひとを褒ほめるばかりでも好よくない。褒ほめる處ところはウンと褒ほめねばならぬが、叱しかる處ところはまたウンと叱しからねばならぬ。是これは何なんの上うへにも必要ひつやうで、太陽たいやうが東ひがしから出て西にしの方ほうへ沈しづむ、即すなはち放はうあり收しゆうありである。若もし太陽たいやうが東ひがしから出でつばなしであつたり、また西にしに沈しづみつきりであつたら放はうあり、收しゆうありと許ゆるすことが出来できぬ。金錢きんせん上の事ことでも同様どうじやうで、自分じぶんの方ほうへ取とり込こむばかりでも不可いけなく、また使つかふばかりでも不可いけない。然しかるに此頃このころは取とり込こむ一方ほうで使つかふことをしないから、物價ぶつゑが騰貴とうきしたり、増貫ましくわんのやうなものが出来できて、社會しゃかいの安寧あんねい秩序ちつじよを亂みだすのである。一家いっかの經濟けいぎの上うへでも、皆みなこの收しゆうあり放はうありで無なければならぬ。而しかして收しゆうあり、放はうあり、其その分ぶんを守まもる人ひとを禪ぜんの上うへでは圓融えんじゆう無碍むがいの人ひととも、大自在だいじざいを得えたる那人なじんとも稱しょうするのである。

## 二 千利休と加藤清正

眞まことに把住はぢゆう放行はうぎやうの道理だうりを心得こころえた人ひとになるに、敢あへて天勝てんかつの奇術マジックを學まなばなくても、指さし一本いっぽんニユツと立てたところに大宇宙だいうちゆうを支さへることも出来できれば、一莖草いっけいそうの上うへにも大伽藍だいがらんを建立こんりふすることも出来できるのである。有名いうめいな澤庵たくあん禪師ぜんじが或時あるとき柳生やぎやふ但馬守たじまのまもに向むかうて、

『私わしを撃うつと思おもふなら、見事みごとに撃うつて御覽ごらんじろ』

と云いつた。そして澤庵たくあん禪師ぜんじは誠まことに無造作むぞうさな構かまへで、ボンヤリ突つつ立つて居ゐた。けれどもそのボンヤリは普通ふつうのボンヤリではない。偉大ゐだなる隙すきの無いボンヤリである。さすが將軍家しやうぐんけの御指南ごしなんやく役やくであつた但馬守たじまのまもも木劍ぼくけんを持もつて幾度いくどか打込うちこまんご身み

千利休

がまへたが、打込む隙間が寸分もなく流汗淋漓として恐縮したと云ふ話がある。把住放行の妙機を體得した人から見れば是れ位の事は何でもない。千利休にも斯う云ふ逸話がある。豊臣秀吉が在世の時代であるが、鬼將軍と言はれた加藤清正は秀吉公が段々奢つて來たから、如何にもして其の奢りを止めねばならぬと思つて屢々諫言したが、何うしても奢りは止まらぬ。其處で清正は考へた。是れは平素傍に附いて色々の事を教へ込む利休が悪い。利休を殺しさへすれば奢りが止まるに相違ない。其處で或時清正は利休の處へ茶の湯に託して尋ねて行つた。利休は清正の訪問を大に喜び席に請じたが、清正は其の席に刀を提けたまゝ通らうとする。これには利休も驚いた。

『茶の湯の法則として茶室に大小を提けて通ると云ふ法はない、刀は刀掛けへ掛けて室に這入つて頂きたい』

と言ふ。然るに清正は隙を見て利休を殺して仕舞はうと思つて居るのだから、

『イヤ刀は武士の魂である、たとへ茶の湯の法であるか知らぬが、武士の魂は片時も離すことは出来ぬ』

と云つて應じない。利休も已むを得ず提刀のまゝ通したが、清正は利休が茶柄杓を持つと其の茶柄杓が邪魔になり、茶釜を持つと其の茶釜が邪魔になり、釜の蓋を持つとまた其の蓋が邪魔になつて、斬り込む隙間が寸分も無い。却つて利休の方が清正の腹を探り、是は一つ自分の方から逆に裏をかいやうと、利休は故意に湯を圍爐の中に零した。忽ち灰神樂が揚つたから清正は驚いて椽に出た。利休は灰神樂の收まるのを悠々と見て居たが、聽て收まるに清正の立つた後は刀が忘れてあつたから、

『貴公は武士の魂を如何召された』

千利休と加藤清正

と云つて其の刀を清正に渡した。清正も是れには冷汗を流したと云ふ。妙を得ると實に理窟以外のもので、利休が把住放行の自由の禪機に向つては、サスガの加藤清正も斬り込んで行く隙間が無い。たとひ一本の木でも、その木に全身が隠れて、その木が邪魔になつて打込むことが出来ない。

### 三 萬法は皆一法究盡

元來天地間に在りとあらゆる萬法は、すべて一に歸するものである。萬法は皆一法である。而して萬法一法とは別物でない。却ち一法を離れて萬法があるのでもなく、萬法を離れて一法の存する道理もない。此の道理を佛教では天地同根萬物一體と云つて居るが、其の一の歸趣を知り、是れを自分の身の上に體顯する此處が道元禪師の所謂、

『盡界に客塵なく、直下に第二人あらず』

と云ふ大丈夫の境界である。眞實此の境界に達した人であるならば、其の行ふところも其の云ふ所も悉く天地の大道を離れたものであるから、佛を呼んで狗ツころと云はうが、また佛を便所の中の糞かき棒であると云つても條理に合致して居る。古の禪僧が或は喝を叫んだり、三十棒を振り廻はしたりしたのは、皆此の境地から出て來たものである。釋迦を罵倒して雲門のやうに『狗子に喫却せしめよ』だとか或は一体のやうに『釋迦と云ふいたづらものが世に出でて多くの人を惑はしにけり』と云ふのも、皆此の境界から云つたものである故、決して大道を離れたものではない。悉く佛教の極致、禪の骨髓を道破して餘すところが無いのである。昔、俱胝と云ふ和尚は、學人が如何なる事を質問して行つても、指を一本ニユツと立て、對問者に擧示するのが常例であつた。『如何なるか是れ佛

法』と云つても指を一本ニユツと立てる、『如何なるか是れ祖師西來意』と云つても指を一本ニユツと立てる。然るに俱胝の指をニユツと立てるのを常に見て居た小僧は、同じく師匠の眞似をして指を一本ニユツと立てる。或る時に外來の禪客が訪ねて其の小僧に向つて、

『和尚は平生どんな事を説法されるか』

と問うた。その時に小僧は待つて居ましたと云はぬばかりに和尚の眞似をしてイキナリ指を一本ニユツと立てて見せた。その事を禪客が和尚に報けると、俱胝和尚は小僧の所へ來て、

『オイ小僧小僧』

と呼んだ。小僧は濟まし込んだもので返事の代りに例の指を一本ニユツと立てて見せた。俱胝和尚是れを見るや忽ち小刀を以て小僧の立てた指を切斷した。小僧

は痛さに耐へず、泣き／＼飛び出した、その後から俱胝が、

『オイ』

と大聲して呼び戻すと、小僧は思はず後を向いて立止つた。俱胝は何も云はずに例の指を一本立てて示したが、此の機會に小僧は忽然として大悟した。後に俱胝和尚が臨終の時に、衆弟子に云はれるには、

『吾は天龍より一指頭の禪を得て、一生受用して未だ盡さぬ』

と遺言して入滅された。同じく指を一本立てるのでも、達した人が立てるのと達しない人の立てるのとは天地の相違がある。俱胝の一指頭には億萬無量の法門が顯現するが、小僧の一指頭は兒戯に等しい。故に雲門和尚は此れを評して、  
『俱胝鈍置す老天龍、利力單提して小童を勘す、巨靈手を擡ぐるに多子無し、分破す華山の千萬重』

と云つて居るが、誠に適評云はねばならぬ。若し本心を識得すれば天龍一指頭が禪ばかりでなく、天地萬有は悉く禪の顯現であると云つても宜しい。天の高く蓋つて居るのも、地の低きに居て萬物を載せて居るのも、山の高く聳えるも、海の深く湛へるも、柳の緑に染めるも、花の紅を示せるも、皆悉く禪の如是當體である。斯くの如く觀じ來れば、盡十方界に現はれたる千差萬別の萬有界は皆悉く禪の現れに非るものは無い。唯禪が種々の因縁に遭遇して、或は松こ現はれ、或は竹こ現れたる迄で、松に古今の色なく、竹の上下の節あるも皆是れ禪の當體である。

#### 四 二面裂破の境

然し初學の者は容易に此の境界に達することは出来ない。それには佛と我とが

一體無二になつて、誠に我が佛か佛が我れかと云ふ二面裂破の境に達しなければ此の道理を體得するこゝが出来ない。禪門に於ては此處の道理を、

『祖に逢うては祖を殺し、佛に逢うては佛を殺す』

と云つて居る。逢祖殺祖、逢佛殺佛と云へば誠に亂暴に聞えるけれども、是れは祖師が我が、我が祖師か、祖師と我とが手を把り眉を結んで親しくなつたのを殺さ云つたのである。然し殺したばかりではいけぬ、向ふの人の様子を見て、或時は殺し、或時は活かし、所謂把住放行しなければならぬ。文珠大士は一本の草を以て、

『此の草は能く人を殺し、此の草は能く人を活かす』

と云つた。其の使方に依つては一本の草で人を殺すことも出来れば、また人を活かすこゝも自由である。誠に人を能く活かす人であれば、又能く人を殺す人であ



る。斯う云ふ人は其の人の働きを以て、向ふの人の様子を見て或は人を殺す手段も又人を活かす手段も無ければならぬ。叱り附ける手段もあり、また褒めて行く手段も具へたる活潑自在の働きのある人は、一目して相手の軽重を知ることが出来る。自分の心が公平であるから、相手の心の姿がチヤンと寫る。たとへば鏡が正直に怒つた顔も喜んだ顔も正しく寫すやうに、相手の心は善は善のまま悪は悪のままに寫すから、一見して容易にその人物を見極めるここが出来るのである。東坡居士は未だ佛教に這入らない時代には、學問のあることを鼻にかけてナニ坊主なんと云つても高が知れたものである。天下の坊主に碌な者は有りはしないと云ふ勢で、或る禪師の處へ行つた。すると其の禪師は、

『お前は全體何と云ふ名だ』

と尋ねた。すると東坡は禪師を眼下に見降し、

東坡居士

『私の名は秤と云ふ、つまり天下の坊主の輕重を皆量るつもりだから私の名は秤と申すのである』

と云つた。時に禪師は大喝一聲、

『喝！』

と叫んで、どうだ秤なら此の一喝を量つて見るがよろしい、輕重を量つたら何んなに重いかと尋ねたが、東坡も是れにはグウの音も出ない。それから東坡は禪門に這入り、廬山へ行つて瀧の落ちるのを見て大悟したと云ふことである。

### 五 脚下を照顧せよ

禪門では『祖に逢うたら祖を殺し、佛に逢うたら佛を殺せ』と云ふ大見識に住しなればならぬと云ふが、斯う云へば多くの人が増上慢の心を起し、東坡のや

脚下を照顧せよ

脚  
下  
を  
照  
顧  
せ  
よ

うな不心得を演ずるので、これを誡むる爲めに『脚下を照顧せよ』と云ふ。平易に云へば足元を能く見よと云ふ程の意味である。何事でも氣を付けて居れば、總てに對して決して隙間が生じない。座敷の歩き方から、下駄の脱ぎ方、さては箸の上げ下しに至るまで、隙間のある人は解る。兵卒が夜間演習に赴いた時にも、此の教訓を守れば、決して狼狽することはない。脚下に氣を附けない者に向つては、斯う云ふ教訓がある。香嚴と云ふ和尚が奇言を吐いて云ふには、

『若し人が木に登りて口に枝を啣へて手を離し、足をぶら下けて居たら、下から人が来て貴殿は何をしてゐるかと問うても仕方はあるまいよ、返辭せねば問ふ人は不満であらう。若し返辭をすれば自身は木から落ちて一命を失ふであらうぞ、這麼場合には誰でも一生懸命ぢやから、一言の返答もしないが當然ぢや、達磨も此の消息を知つてゐるから、あのやうに九年面壁さ、その無言を尤めて

世間の不文漢は何も知りくさらぬと云つて笑つたであらうぞ、今日でも矢張同じ事だ、何程長談義しても、皆が會得するものではない』

脚下を照顧しないものには、木に登つて枝を口で啣へて手も足もぶら下げ、そして何か談して見ろと云つたら、實に其んな不條理なことが出來ますかと云ふに相違ないが、能活能殺の眞精神を得て居るものには、斯ることは兒戯に等しい。此の大丈夫のところを超州和尚は、

『諸人は十二時に使はれるが、老僧は十二時を使つて行く』

と云つてゐる。禪の立場から見れば世界は心の現はれで、天地萬物は皆心の影法師である。心の外に別の世界は無い。皆心の所造で向ふの物は心の現象である。其の上から云へば天地は悉く自分の戯具であると云つても宜い。能く考へて見ると自分ある故に世界がある。世界と自分とは誠に知音である。自分の心が色々

に現はれて来るに過ぎない。斯う考へて来ると、香嚴樹上の話などは何でもないことである。能活能殺、把住放行自由の分のある人からは、兒戯に等しいものとなる。

### 六 末期の一句

仰山

敢て吾人は千里眼に待たなくとも、把住放行の妙機さへ得て居れば神通妙用の働きを現はすことが出来る。仰山と云ふ和尚が居た。其處へ一人の坊主がやつて来た。仰山が、

『尊公は見たことも無い坊さんだが、恐らく支那人ではあるまい』

と云ふと、其の坊さんが、

『私は印度の僧である』

と云ふ。仰山なる程とうなづき、

『さうか、印度を何時出發した』

と問ふ。坊さんは平気で、

『印度を今朝立つて来ました』

と言ふ。是れは所謂羅漢の神通妙用とでも云ふのであらう。時に仰山は忽ち叱り飛ばして云ふには、

『神通妙用は汝に返へす、佛法は夢にだも知らず』

と云つた。蓋し空中を飛んで歩いたり、水の中を船なくして歩くのが羅漢の妙用であるかも知れぬが、空を飛ぶのには鳥の方がよろしい水の中を自由に泳ぐことは魚の方が上手である。こんなことを佛法だと心得たら大變に間違ふぞと仰山が叱り付けた。其時に坊さんが、

飛衛と  
紀昌

活殺自在の妙機

二美

『私は五台山に来て文珠を拜まうと思つたが、今此處に釋迦に逢つた』

こ云つて大層此の仰山和尚を褒めたと言ふ話がある。昔、飛衛と云ふ弓の名人  
こ紀昌に云ふ弓の名人が野中で出遇つた。紀昌が一箭射ると飛衛も透さず一矢  
を放つた。名人同士のこころであるから、其の矢が途中でピタリこ合つて、二本と  
も其處に落ちたと云ふ。禪機の妙用は此處である。何人も知る有名な話であるが  
快川紹喜禪師は、武田信玄の歸依を得て、甲斐の惠林寺に住せられた。然るに信  
玄死して、其子勝頼と織田信長との間に隙を構へ、あはれや勝頼は天目山に於て  
自刃して相果てた。國亡びて外護すでに無し、何の面目ありて他人に會せむやと  
云つて、一國の僧を悉く惠林寺に集めた。信長は禪師の名を聞いてこれを招い  
たが、禪師は應じない、信長怒つて軍兵數百人をして山衆を驅りて山門に上らし  
めた、衆徒一百餘人皆山門にあり、信長遂に門に火を放ち、火は炎々として山門

快川紹  
喜禪師

滅却  
火亦  
涼心

に燃え上つた。禪師は此の時少しも動ずる様子もなく、垂語して曰く、

『諸人即今火焰裡に向つて如何か大法輪を轉じ去らむ、各一轉語を下して末期の  
一句とせよ』

時に大衆は皆その思ふ所を述べた、最後に禪師は、

『安禪は必ずしも山水を須るず、心頭を滅却すれば火も亦た涼し』  
と、火の法衣に及ぶも端然として動かさず、衆と共に火定に這入つた。此の境界は  
容易に出来るものでない。禪家の將匠にして初めて此の妙用を現することが出来る。

# 戦争 禪

## 一 森羅萬象悉く戦争

植物界の戦争

世界の全現象界を見るに、悉く戦争でないものはない。先づ植物界を見よ、植物は年々數百の種類を地上に増して、全世界を植物の天地に化さねば止まざらんとし、稻は一粒米といへども、幾百の米粒を産み、天地を擧げて草の世界たらしめんとしてゐる。僅に植物界に見るも、すでに斯くの如くである。否植物と名づけらるゝ植物は悉く此の氣概を有するが故に、各々一草一木のみの世界となし終らんとして互に生存競争をなしてゐる。これ取りも直さず物界の戦争である。單に植物界のみではない。人間界に於ても、政治家は政争に日も亦た足らず、商

業家も商戦に浮身をやつし、農に工に日々の運作轉動は形に現れたる軍人の戦争と何等異るところは無いのである。

## 二 良心あるものは勝つ

社會は常に平和の一面を有すると共に、争鬭の一面を有するものである。故に貝原益軒曰く、

良心と野心の

「人間の一生の歴史は、たゞ良心と野心の戦、これなり」

と。善心と悪心とは常に吾人の思想界に屯して、互にその領分を擴充せんとして争鬭しつゝあるのである。佛教に於ては、人間の性質は善惡相半ばするものにして、修養するものは其の悪心と闘つて善心を勝たしめ、善心をして愈々累善の功德を積むことを得しむるにある。故に善人とは善心の多く心を領するものを云ふ

良心あるものは勝つ

善人

のである。換言すれば人間としての善人は、悪を全く退治せる人にあらずして戦ふごとに善の多く勝利を得たるを云ふのである。悪人とは今述べし反對にして善を全く退治せる人にあらずして、戦ふごとに悪の多く勝利を得たるを云ふのである。されば如何なる悪人でも、善心が全く死滅するものではない。平清盛のやうな悪人でも、重盛の諫言に依つて六波羅に戈を向くることを思ひ止つたのは内心を占有する悪の分子が多いが、一點善の分子の存したからである。若し全く善の分子が潜在しなかつたならば、恐らく重盛が如何に熱涙を振つて極諫しても遂に思ひ止らなかつたに相違ない。釋尊が『諸惡莫作、衆善奉行』の教訓も此處から出たものである。人間である限りは、如何なる善良なる者でもまた悪心ありて動搖しつゝあることを免れない。これが人間としての實相である。彼の孔子が七十にして則を越えず云つたのも、所謂人間としての良心の大勝利者たるを表

諸惡莫作、衆善奉行

するものに外ならぬ。眞の佛眼を以て見る時は、孔子すらなほ心中の大賊を退治せし大勝利者と許すこゝが出来ないのである。

### 三 煩惱の退治

全體人間は生れるが早いから、貪瞋痴慢疑と云ふやうな悪の分子が伴ふ、而して此の悪の分子を眞に悪の分子であると知ると知るとは容易でない。多くは是れを珍重して寶玉となし、育て上げて居る。悪の分子を殺さうとしても、戦争しつゞけても平らけることの出来ないものを、自ら好んで育てんとするのは、賊を認めて子とするやうなものである。故に佛教に於ては是れを過母を養ふと云つてゐる。また釋尊は、

『常に伺つて人を殺すこと怨家よりも甚し』

と教へられた。油断もすきもあつたものではない。前述の孔子の如きは、未だ三毒五欲の煩惱の本源を徹見せずして、妄想を雌伏する習慣力に依つて、たゞ野心の妄動を止むるのみで、妄想の根源を切斷しないのである。故に未だ眞の泰平、無事の人と許すことが出来ない。斯くの如く人間の眼より見たる世界は、植物界も人間界も、物質的にまた精神的に悉く悪戦苦闘の戦場にあらざるはない。尤も此の戦争も、禪界に入りて禪の境界より見る時は、皆これ活禪の活光明であるけれども、この眼光の未だ開けざる者に取りては、此の光明も阿修羅の苦惱であらねばならぬ。故に此の大敵を全滅して永劫泰平の天地に安住せんとするのが佛教の大目的である。「碧巖集」に心中に三毒五欲の群起する有様を述べ、續いてそれを退治する順序を説明したものがあつた。文章も面白いし、比譬も巧みであり、順序も整然として吾人の理想的活修養訓であると信ずるから、左に全文を掲げて見る。

#### 四 夾山和尚の降魔表

#### 降魔表

それは碧巖集の第一卷の終りに見えて居る文章で、夾山無碍禪師の作つたもので、『降魔表』と稱せらるゝものである。

臣聞く、三乗路廣うして法界涯無し。智海晏清にして、十方安泰なり時に魔軍有り、競ひ起つて心田を侵撓す。六賊既に強うして心王驚動す。朝に百怪を生じ、暮に千邪を起す。眞如を撼惑し、法體を困勞す、菩提の道路隔絶して通ぜず、涅槃を破壊し、三寶を傷殘す。無爲の珠玉悉く偷將せられ、大藏の法財皆劫奪せらる。塵勞日を翳まし、欲火天に亘る。法城を飄蕩し、聖境を焚燒す。臣乃ち斯くの如き暴亂を見て、佛法以て存し難きことを恐る。遂に六波羅

密と商量して同じく剪滅せむとして、性空を遣はして密使たらしめ、魔軍を聽探するに、現に今屯して五蓋山中に在り、八萬四千餘衆有り、既に體勢を知りて計る事利那に在り、遂に十八界の雄兵を點して並に體空を立て、號を爲す人々無礙の力有り、箇々勇健の能を懷く、直心見性の功を爲し、一正百邪の亂を去る。堅固の三昧鏘を執り、智箭彈弓光明の慧劍、大乘門中に向つて訓練し寂滅山内に安營す、三明嶺上に旗を開き、八正路邊に排布す。大覺の性を遣はして捉生の將と爲し、四方に遊歴して妄想の跡を捜求す。無明の蹟を抄截して復慈悲王をして三毒の塞を破し、忍辱の帥をして嗔怒の城を伐ち、精進の軍をして、傲慢の妖を除き、喜捨の士をして慳貪の賊を捉へしむ。逡巡として魔軍大に起り、殺氣天を衝く。臣乃ち摩訶を部領して一時に齊しく入る。爾の時に當りて眼色を視ず、耳聲を聽かず、鼻香を嗅がず、舌味を了せず、身觸を

受けず、意縁を攀ぢず、志を一にして向前して念々退らず。倏忽として魔軍大に敗れ六賊全輸、殺戮無邊にして掃除蕩盡す、妄想を生擒し、無明を活捉し領して涅槃場中に向つて慧劍を以て斬つて三段と爲す。煩惱の林當時に摧折し人我の山化して微塵と作る。癡愛の網智火に焚燒せられ、邪見の林慧風に吹塌せらる。茲に因て三明再び朗かに、四智重ねて圓かにして、内外瑕無く、廓然清淨なり。心王歡喜の殿に坐し、眞如解脱の樓に登り、自性無碍の堂に遊び三身法空の座に踞す。茲より法界寧靜にして永く囂塵を絶す。共に生死の河を渡り、齊しく菩提の岸に到る。魔軍既に退いて合に具に奏す。實に一言一句を苟くもせず、三讀四讀するに従つて愈々その意味の深遠なるを覺えしむるものがある。何人と雖も降魔無くして成道するとは困難である。然るに方今は教理なる要塞の地圖は研究すれども、その要塞に逼迫して、第一線第二線



と進撃するものがない。抑も八相成道の第一段に降魔成道の要旨を示されてある。然るに教理を研究するものは漸く理論に止りて、たゞ一實相なり、一眞如なり、煩惱即菩提、生死即涅槃なりとして、更に戰場裡に驀入して、大將の首を擧げて來るものがない。

五 超越して格外の玄機を發用せよ

然るに此處に注意せねばならぬことは、世上或は死に處して泰然自若、神色を變ぜざるものを見て豪傑なり、大悟底の人なりと考ふるものがあるが、眞に其の域に達した人と許すことが出來ぬ。夫れはたゞ度胸の強いもの云ふべくして、眞に安心立命した人ではない。佛法上の度胸は、一條の生死上に脈血貫通して斷つべからざる者がある。夫れは何故であるかと云ふに即ち一點無縁の大悲心を

起し順逆二境に向つて一點の眼華を見ず、活脱現前し、格外の玄機を發用することを得るのである。昔支那趙の國に蘭相如と云ふ人が居た。學問があつたので趙王に重く用ゐられ、やがて天下を經綸するやうになつた。或る時秦王が趙の壁と十五城と交換しよう云ふので、外交上止むなく、趙王は相如に命じて壁を持參せしむるこゝになつた。其の時に外の臣下の者が、大切なる壁を相如の如き賤人に命じて遣はするは、如何にも趙國に人無きが如くである。よろしく途に迎へて殺し、壁を奪ひ取らん云議した。それを或る人が聞き、相如に委細の話をなし、今度の使を辭して命を永へよと私に勸告した。然るに相如は、自分は此使は如何にしても辭することが出來ない。よしや不幸にして自分の一命は取られてもそれは道に殉ずるものである。道無くして自分は長命するを欲せないと云つてその勸告を斥けた。然るに茲に殺さん云圖つた人々も相如の此の立派なる斷言を聞

超越して格外の玄機を發用せよ

いて、殺意を翻したのであつた。さて相如は秦王の許に行き趙の壁を國王に奉つた。處が如何にしても秦王が十五城を呉れさうな氣配がない。相如は早くも向ふの意志を知り、計略を回らして曰く、

『秦王よ、この壁は惜しきかな瑕がある、その瑕を御知らせ申さう』と欺きて取返へし、さて顔色を變じて曰く、

『王の容子を察するに十五城を惜むの風がある。然らば此の壁を銅柱にあて、打ち砕いて仕舞ふ』と大呼した。そして銅柱の傍に近寄つて行く有様は恰も怒れる大虎の如くである。秦王もその見幕に恐れ、

『然らば十五城を與へんも、その計ひをするまで壁を持ち歸れ』と許された、その後また澗池と云ふ地に秦王と趙王と共に遊んだこころがある。秦王は趙王の琵琶に堪能なるを知り命じてそれを弾かした。趙王は誰に相談もなく秦王の命を聞

いてこれを弾いたので、相如大に怒り、それでは秦王に籥を吹かしめねばならぬと言つて、自ら秦王に向つて曰く『王は籥が巧みであると聞く、趙王が非常に所望である故、是非一曲吹きたまへ』とこころが秦王はこれを辭した。ソコで相如が、

『若し秦王が此れを辭せらるゝに於ては即座に王を殺さん』と一步も退かぬ。時に秦の將軍が秦王を守りて腰の劍に手をかけチリ／＼と寄つて來るので、相如は兩眼も裂けよこばかり強く呪んだ處が、將軍もその威に畏れて劍をも抜かずに退いた。秦王は終に籥を吹かねばならぬ事になつた。後に藺相如が功に依つて大臣となり、位は趙將なる廉頗の上にあつたので、廉頗太だこれを喜ばず、彼の相如は口舌に於て我が上に位するも、自分は攻城野戰等の勞苦に於ては彼よりも數等の上位にある。然るをその下に位するのはいかにも殘念である。何時が折があつ

超越して格外の支機を發用せよ

たら辱めてやらうと狙つて居た。相如はその殺意あるを知りてより以來、参内しても彼と面を合せぬやうにし、偶々途中で廉頗を望めは此方から廻避して、側の人から見れば如何にも彼を恐れ憚るやうに思はれた。其處で相如の家人が云ふには、『廉頗の如きものを討つには容易なこゝであるのに、何故に斯くも君には恐れ玉ふか』と問うた。その時に相如が曰く、

『私は決して彼を恐れはしない、秦王手中の璧の奪ひ返へし、秦王に吹簫せしめたこゝに比ぶれば、彼一人位を討つことは何とも思つて居ない。然し今秦國を初め外國が趙國に事を構へないのは、確かに彼と自分との二人が居るからである。若し兩虎相争へば必ず一方は死するに相違ない。さうしたら隣國は大に喜び隙を覗つて軍を起し趙を攻め取るであらうと思ふ。故に二人共に命を全うして國を萬代の安きに置かうと思ふ故に、彼れと争ふことを避けるのである』

廉頗此の言を聞いて此れまでの自分の淺薄なりし心を耻ぢ、大に謝して二人は此後共和して國を治めたと云ふ。

### 六 最後の勝利者

生死出脱

吾人をして云はしむれば、蘭相如こそ眞に生死出脱の人であると思ふ。生死を超出しなければ、生死を自由自在に活用することが出来ない。即ち生死の執着から離れねばならぬ。此の上から見れば人生は、空中に雲の往來するが如く、水上に鳥が往來するが如く、自由自在なることが出来る。故に興へて云へば、若し人此の横暴極りなき現代の戦争に勝たんと欲するならば、是非好惡順逆等は一切關せず、直ちに眼光落地の眞境に驀入すべきであらう。かくて初めて活脱現前し、格別の玄機を活用することが出来る。すべて世間出世間の事に關らず迴然として

後最の勝利者

獨脱どくだつすることが最も必要ひつようである、此の上うへにして初めて自在じざいの妙用めうようを得る。見よ、金錢きんせんに執着しつちやくする人は、金錢きんせんを山の如ごとく有いうしても、却かへつて自在じざいに使用ししようすることが出来ぬ。身體しんたいも亦またた然しかりで、若もし自體じたいに執着しつちやくして顔かほに裝飾さうじを施ほどこしたり、手てに白粉おしろいを塗ぬたりして、雨あめを恐れ風かぜを厭いとうて居ゐる様な事ことでは、筭はし一本ほんも使用ししようするここが出来ぬ政治家せいぢかでも、軍人ぐんじんでも、教育家けうがくかでも、宗教家しうけうかでも、此處こゝの道理だうりを心得こころえるやうになれば始めて眞正しんせいの仕事しごとが出来、また浮世うきよの戦争せんそうに勝利しりょうりを得るのである。故ゆゑに古人こじん曰いはく、

外そとに山河大地さんがたいぢあることを見ず、内うちに見聞覺智けんもんかくちある事ことを見ず、求もとむべきなく度どすべきなく、打成だじやう一片ぺんならば一毛頭上いちもうとうじやうに在ありと雖いへども、廣ひろきこと大千沙界だいせんしかがいの如ごとく、鑊湯爐炭くわくとうろたんの中うちに居きよすも、安樂國土あんらくこくどに在あるが如ごとく、七珍萬寶しちしんばんぼうの中うちに居きよすと雖いへども、茅茨蓬蒿ぼうしほうかうの下もとに居きよするが如ごとく。

と述のべてある。即すなはち萬境ばんきやうと我われとの封域ほういきを絶たつて、任運にんうんに活動くわつどうして、一點眞理てんしんりを誤あやらぬに至いたつて戦争せんそう禪ぜんの勝利しりょうり者しやたることが出来る。

### 七 鐵馬に騎つて重城に入る

要えするに上じやう述じゆつせる如ごとく、世間せけんも出世間しゆつせけんも、一いとして戦争せんそうにあらざるは無い。殊ことに禪ぜんの戦争せんそうに至いたつては、前まへに擧あげし夾山かつさんの『降魔表かうまへう』に見みる如ごとく、世間せけんの戦争せんそうよりも激烈げきれつである。全く命いのちがけの大戦争だいせんそうで、然しかかも此この戦争せんそうたるや要塞えうさいも鐵條網てつじやうまうも設まげられぬ、設まけてもこれ等は閑葛藤かんかつとうに過すぎない。直たちに鐵馬てつばに騎のつて重城じやうじやうに入り、大將たいしやうを生いけ擒とりにするのが禪ぜんの戦争せんそうである。故ゆゑに古いにしへからの禪界ぜんがいに於おける宗將しうしやうの苦心くしんを列擧れつぎよすれば、百丈和尚ひやくぢやうしやうは馬祖禪師ばそぜんじに鼻端びたんを捏住ねつぢゆうされて安心立命あんしんりふめいし、臨濟大師りんざいだいしは黃檗和尚わうぼくしやうから六十棒むじゅうぼうを喫きつして初めて家國喪亡かこくさうぼうし、風穴禪師ふうけつぜんじは南院和尚なんゐんしやう

に折挫されて面門を打失し、雪峰和尚は、巖頭和尚に一喝されて膽魂を驚落し、雲門禪師は左脚を逼折され、香巖は片瓦竹根に觸れ、靈雲は桃花を見、東山は水上の影を見た。實に古人の修行の跡を見るに苦心歴々たるものがあつて、今日に於て想像して、猶ほ血涙滴々たるものを覺ゆるのである。故に雪竇は此の苦心の状を句に現して『二十年來曾て苦心す、君が爲めに幾度か蒼龍窟に下る』と云ひ、又『曾て鐵馬に騎つて重城に入る、勅下つて傳へ聞く六國の清きことを』と云ひ或は宏智は『手を拂ふ劍氣兵を洗ふ威、亂を定むる歸功更に更れ誰そ』また『泰平元より將軍致す、許さず將軍の泰平を見る』と云ひ、或は大燈國師の『佛祖切斷して吹毛常に磨く、機輪轉する所虚空牙を咬む』と云ふが如く、悉く是れ戰爭禪の適意を示すものである。故に禪を以て太平の閑遊戯と思ふが如きは大なる誤解である。禪者もまた一向に悟りすまして、無事甲裡に墮在し黙々として隋眠を

貪るが如きは、禪界の惡魔にして許すべからざるものである。

## 大丈夫の人

### 一 白居易と鳥窠禪師の問答

世の中が進歩すればする程人生は複雑になつて行くが、其の中に安心して生活して行くには、修養するに越したところがない。私をして云はしむれば、修養と云つても別の事ではない。善事は如何なる小善でも爲し、惡事は如何なる小惡でも斷じて爲さぬと云ふことである。昔支那に白居易と云ふ學者があつた。當時の學界に於ける最高權威の人として人も許し自らも任じて居たが、當時鳥窠禪師と云つて有名な禪僧が居た。此の和尚は修業に熱心で常は木の上に坐禪して書物を讀

修養の  
意義の

んで居た。懈怠の心を起し、少しでも油断すれば樹から落ちる、つまり世の中を渡るに何時も木に登つて居るやうな油断なき心の修養を積まうとして斯く木に登つて修業して居られるのである。それを下から見れば恰も鳥が巢を作つて居るやうに見えるので、時人呼んで鳥窠禪師と稱して尊敬したのである。或る時白居易が鳥窠禪師の相變らず樹上に坐禪しながら書見して居るところにやつて来て、『佛法のギリ／＼のまゝを説明せよ』

と云つた。すると禪師は、

『諸の善は修行せよ。諸の悪はなすことなかれ』

と答へた。善事と云ふ善事は人として爲さねばならぬ。また悪事と云ふ悪事は断じて行ふ可きでないことは、これ普通の事であつて、白居易としては別に禪師に學ばなくともよろしい。それで、

七十の老翁は行ふ能はず

『何だ、そんなことなら三歳の童子だつてよく知つて居るワイ』

と云つた。時に禪師はカラ／＼と笑つて、

『三歳の童もこれを知れども、七十の老翁またよくこれを行ふ能はず』

と答へられた。これにはササガの白居易も二の句が繼げなかつた。そこで此の一言下に禪師を拜して弟子の禮を取つたと云ふ話がある。諸悪莫作、衆善奉行の道理は三歳の童子も知ると雖も、果して自分が、これを正しく行つて居るか考へると、たゞ一日の内でも是れを實行して居るこゝが少い。殊に此頃のやうな世の心でも善事の行はれることが少く、悪事ばかりが萬事について行はれ勝ちである。これは物質文明の弊害として、矯正せねばならぬ肝要な問題である。

## 二 心の上の地獄極樂

大丈夫の人

三六

地獄極樂

然らば如何にして此の惡風を矯正するか云ふに、因果の道理を深く信ぜしむるより外ない。即ち善事を修すれば必ず善い結果がある。自分の身の上に幸ひが來るこいふ事は疑ひない。然し廣く人生と世界との關係から、因果を論ずるには人間社會のやうに歴然と説明することが出來ないので、夫れで昔は宗教の上でも未來往生と云ふやうなこゝを構へたものであらう。昔の人が地獄極樂云ふ事を云うたのは此の世の中を押し廣めて云うたもので、鬼なぞと云ふものは決して居らぬが、人間の惡相の者を具體化して斯く名づけたものである。極樂と云ふも地獄と云ふも決して遠方にあるのではない。皆自分の心一つにあるのである。されば一休和尚の歌にも、

傀儡師首にかけたる玉手箱

佛出さうこ鬼を出さうと

と云つてゐる。善事をなして佛なるも惡事をなして鬼なるも、皆自分の心一つに歸着することである。即ち地獄も極樂も現在此世の中にあるので、惡事をすれば良心の呵責を受けて、汝は悪い奴であると心から自分を苦める。家庭の上では、一家の不和の爲めに亂脈となつて、骨肉相食む、或は互に財産を奪ひ合ふと云ふやうな地獄を演ずることになる。子にして親を殺すものあり親にして子を殺すものがある。或は妻にして良人を殺すものあり、良人にして妻を殺すものあり、實に此の世の中は地獄である。極樂は吾々の地獄が其のまゝに極樂である。善い事をして居る人は精神が平安である。従つて見るもの聞くもの悉く樂しみの種ならざるはない。故に地獄極樂と云つても外に求める必要はない。自分の心に向つて求めるより外はない。嘗て自分が君命を帯びて獨軍を青島に攻撃すべき出陣前に臨みて、

心の上の地獄極樂

三七九

大丈夫の人

二八〇

佩く太刀をまた拭はんと窓近く

いづれば涼し蟬時雨して

ご詠じたのも此の精神に出でたものであつた。自分が出陣するによつて、獨軍と干戈を交へて如何なる修羅の巷を演出するか解らぬ、然し我は正義を以つて戦ふのである。我が此の太刀は活人劍の面目を現すもので、然かも君命を恥かしむる事は日本男子にして、大恥辱である、されば自分は出陣に臨んで此の太刀に依りて如何なる修羅場と化せしむるかは知らぬも、心が安樂である。何等の疚しいところがない。此の平靜が取りも直さず極樂であるご感じたのである。

三 昔の青年と今の青年

斯く善事をする上に必ず善果があると信じてても容易に實行することが出来ぬは

修養の道程

人情である。故に此處に修養と云ふことが出て來るのである。道元禪師は修養の道程を示して曰く、

山に登れば須らく頂に到るべし。海に入らば須らく底に到るべし、山に登りて頂に到らざれば宇宙の寛廣を知らず、海に入りて底に到らざれば滄溟の淺深を知らず、乃至一踢に踢翻す四大海、一推に推倒す須彌山。

吾人は此の大丈夫の決心がなければならぬ。由來日本人は堪忍力乏しく、辛抱心少なく、物事に飽き易く厭ひ易いのは事實である。是れでは到底世界の一等國として生命を持續して行くことは困難である。殊に此頃の青年に到りては更に鬱勃たる元氣なく、徒らに成金熱に浮かされるでなければ、女か男かを疑はしむるやうなお白紛臭い男が多い。稀に修養に志したり、禪を修行して鍛鍊を計るものも無いでは無いが、漸く其の門にすら入らずして途中に挫折し、禪ならば三十

昔の青年と今の青年

二八一



棒を僅かに喫却する位にしてへコたれて止めて仕舞ふ。斯くの如きが現代青年の一般である。畢竟するに現代の青年は昔の青年に比し概して打算的に出来て居るが、闊達なる氣力に乏しい。あまりに柔弱過ぎる傾向がある。昔は今日の如く整頓した學校機關は無かつた。謂はゞ一種の寺小屋式の塾であつた。彼の大分縣は學者の多く出た土地であるが、帆足萬里と云ふ人の門下に毛利と云ふ男があつて此男毎晩のやうに門外に往來をした。いくら塾長が説諭しても聞き入れぬ。依つて或る夜の事例に依つて毛利の外出より歸るのを堀の傍に待つて居た塾長の帆足は、やがて毛利が堀を乗り越して内に入らんとする一刹那、大音聲を張上げて、

『貴様は誰ぢや』

と怒鳴つた。堀の上なる曲者はビツクリするかと思ひの外、悠々として片手に貧乏徳利を提けたるまま下り來り、

『俺は毛利ぢや』

と云つて平然たるものであつた云ふ。この毛利と云ふ男は元來の酒好きで、晝は我慢をして居るが、夜になるととて堪へ切れないで、人の寢靜まつた時刻を見計らひ、密に床を脱け出でては貧乏徳利を片手に酒買ひに出かけるのであつた。

又これに似たやうな話がある、それは中村と云つて、彼の巖谷一六居士の師匠であるが、ある日のこと塾に來りて講義を聞いて居る様子が如何にも可笑しい。それで机に憑つて前にもたれたまゝ頻りに袖を氣にする。そこで講義をして居る先生よくく見ると、片袖のない衣服を纏つて居る。あまりの不思議さに、

『汝が衣服の袖は？』

ご問はれて、中村は悠然たる態度で、今朝あまりの寒氣に堪へ兼ね、酒を飲んで防がうとしましたが、お錢がありませんので、止むなく片袖をちぎつて酒代にしたのであると云つたさうである。これは今日の世には餘り賞めた話ではないが、往時の學生が如何に豪氣あり、枯淡に甘んじたか云ふことが解るではないか。何も酒を飲めよと勧めるのではない、たゞ此の無鐵砲な闊達の意氣は現代の青年の學ぶべきであると思ふ。

#### 四 目的の貫徹

修養上に最も大切なるは勇氣である。世の中に生れて醉生夢死する程つまらぬ事はない。何事かやれるだけの事は實行せねばならぬ。人間の道に契つた、遠大なる目的を以て、其の方針に向つて力のあらむ限り、腦力の續く丈け盡すのが人

間の爲すべき事である。唯グズグズして何等目的もなく、空しく死んで仕舞ふのは、むしろ畜生にも如かざるものではあるまいか。古人の詩に、

『地に落ちて男子たるもの、何事か爲す可からざらむ』

と云ふのがあるが、實に青年は此の元氣がなければならぬ。此の意氣を以つて修養して行けば、自己の目的を貫徹するのみならず、自然のうちに自分の行ひが大道に合致するから、強ひて行はんと努力しなくとも、諸惡莫作衆善奉行の道理もチャンと履行されて居るのである。人間に取りて何が一番大切であるかと云へば俗人には金が尊い、名譽が尊いと云ふものが多いであらうが、名譽よりも金錢よりも生命よりも大切なるは、此の大道に合致することである。彼の楠正成は湊川に於て自害した。足利尊氏と戦つて敗北した。敗北したが決して楠公を非難するものはない。是れは武士道に合つてゐるからである。生命が道よりも大切なも

のであるならば、あの場合楠公はいくらも逃れて助かる方法はあつたに相違ない然し楠公は命も何も捨てなければならぬ場合に立至つたのである。楠公としては忠義のために武士としてこゝで死ななければならなかつた。死すべき時に死せば楠公の人格としては非難すべきでない。即ち楠公は道の爲めに肉體的に死し精神的に現成したものである。斯くの如く修養その堂奥に達して、大道と合致し、自己の心身變つながら修めることが出来たならば、それを以て自分だけが満足してはならぬ。今度は自分の得たる安心の道を外に向つて傳へなければならぬ。

### 五 自利利他の活動

釋尊は明星を見て大悟された。その時の言葉に曰く、

有情非  
成道同時

『有情非情同時成道』

語は簡單であるけれども意味は頗る深遠である。若し釋尊にして情を以て自己のみ樂しむと云ふ考ならば、決して斯うは仰せられなかつたに相違ない。此の意味は心ある人間、畜生は云ふに及ばず、心なき山川草木に至るまで悉く大悟したと云ふのである。更に一歩進んで説明を加へれば、釋尊の如き大人格者になれば悟つたからと云つて自分ばかり其の悟りを獨占しては居ない。その悟りを一般の者に分ち與へて、自分と等しい大安心の境界を得せしめたいとの希望を述べられたのが、前の一句である。故に釋尊は悟るまでは山に籠りて修行されたが、いよいよ大悟されると山を降りて町に出で、人に應じ機に従ひ五時八教の説法をせられたのである。吾人は釋尊の悟徹の活動が町であること、即ち修行後の活動の場所が人間社會であつたことに大なる意義を見出すものである。釋尊が悟つてからの生活は、決して消極的ではない。飽くまでも積極的である。然るに後に至

りて兎角く是れが誤解されて、天上天下唯我獨尊であるとか、獨立無絆であるとかと云つて、自分獨りで悟り込んで仕舞ひ、山の中へ這入つてお経でも讀むことが眞の佛教であるやうに思ふものが多くなり、現代もその風習が残つて、僧侶と云へば二世紀も三世紀も世間から遅れて居るかの觀がある。僧侶諸君も如何にしても自覺しなければ全く社會から無用のものとなると思ふ。現代人の要求に應じようとするには、佛教は何處までも社會化せねばならぬ。社會から超然として居るのでは現代の佛教徒と稱することが出来ない。否、現代は佛教徒と云はず、學者でも倫理學者でも、すべて昔のやうに消極的ではいかぬ。昔の人の社會を離れて超然主義を取り、其の一人を喜ぶと云つたやうな風ではいかぬ。今は社會に接近し、社會化し、矢張り社會的人として働かねばならぬ。此の無常變遷して常なき社會に居し、前述の修養の積んだ人にして、如何なる困苦にも堪へ忍び、自利

佛教の社會化

利他の爲めに活動して行くことが出来る。斯く何者にも惑はされず、如何なる困難にも打ち勝ち、社會の中に頭角を現し、一世を動かすやうな英邁なる人格者となるのが、現代に於ける大丈夫の人である。かゝる人にして初めて生存の意義があるのである。

六 平常心是れ道

觀音の理想

觀音には三十三身の應身がある。即ち觀音の理想は、社會に應現して、社會的活動する人々に大活機を與へるに云ふのが本意である。それ故軍隊ならば將軍として應現し、商店ならば主人なり番頭なりとなつて應現し、すべて社會的に活動して行く人に社會活動の要素を與へんとするので、これは觀音經を讀む人の普ねく知るところであらう。大阿羅漢にも十六羅漢或は五百大羅漢の別あるのは

平常心是れ道

悉く其の方面々々の願力を以て活社會の人に、大活機を與ふるに云ふ本意からである。すべての祖師、高僧と稱せらるる人は皆社會化して社會的に活動した人のみである。若し社會化したる說法でなかつたならば、社會的人類に對して決して共鳴しないであらう。それがすでに古聖を去ること數千年に及ぶ今日でも、古聖の言行に接して吾人が心を動かされるに云ふのは、其の言行が社會に觸れて居るからである。自分は日置黙仙禪師に參禪して以來禪宗の信者となつたが、禪の如きは最も社會的なものである。たとへば超州和尚に或る僧が、

『如何なるか是れ佛』

と問へるに對して、

『平常心是れ道』

と仰せられた。即ち日常吾人が活潑々地に社會的に活動して行くものが佛法であ

ると云ふのである。また同じく或る僧が、

『如何なるか是れ佛』

と問ふと、

『庭前の柏樹子』

と答へられてゐる。決して佛法を遠くに求めない、目前の事に即して佛法嫡々の妙旨を述べて居る。兎もすれば禪を修する者は厭世的になりがちのものであるが禪の本旨は決して然うではない。また坐禪は坊さんの眞似をするものゝ普通の人は考へるか知らぬが、今も超州和尚の答へにも見える通り、禪は吾人の日用底のものである。それを勘定違ひをして軍人でも商人でも、或は醫者でも官吏でも自分の仕事を閑却して、坊サンの眞似をして坐禪しなければならぬやうに思ふのは間違ひである。尤も坐禪するに越したことは無いが、坊サン以外の人には、只管に

平常心是れ道

坐禪して居る閑暇がない。自分をして云はしむれば、醫者には醫者の禪があり、軍人には軍人の禪あり、商人には商人の禪がある。商人が坊サンの眞似をすることはいらぬ。商人は商人の禪をやればよろしい。商人のお經は大福帳である。毎日大福帳をくつて、坐禪をして居ればそれで商賣は繁昌する。軍人には御勅諭がお經である。それを眞に身に體得すれば、國防も忠義も立つ、これが禪の本旨と合致する。故に専門家は大に専門禪を鼓吹して、世の人を教化するがよろしい。軍人は軍人で軍機と三昧により、耶蘇は耶蘇、天理教は天理教と、皆なその職々の禪をやるがよろしい。

七 その職々の禪

その職々の禪はやつてもよろしいが、然しそれにはチャントお互に一貫した

ところがなければならぬ。即ち一生を貫いて變らぬことが必要である。孔子は仁を主張し、此の仁を以て一生を貫いてゐる。佛陀の一生も一貫してゐる。四十九年の間にその説かれた經文は澤山あるけれども、それがチャンと一貫して居る。そこに人生の價値があるのである。男子として此の世の中に生れ出でた以上は、あらゆる限りの能力を盡して、出来るだけの事をやらねばならぬ。それには矢張り自分が上述したやうな修養の道程を歴なければならぬ。修養の結果如何なる大きな事業も出来る。丈夫とは如何なる旨かと云ふに、一丈の男と云ふことであつて、五尺二三寸や六尺不足の者を丈夫と稱することは出来ない、苟も小丈夫又は半丈夫の分際で一生を終るべきではない、やはり何處までも大丈夫の鐵漢となるの修養を積まねばならぬ。

### 禪と實際的修養

#### 一 教外別傳の宗旨

佛、成道し已りて法を説くこゝ四十九年、人を度するこゝ無量無邊なり。斯くて應に度すべき者は皆已に度し訖り、今を去る三千年の二月十五日、跋提河畔は婆羅雙樹の間に於て、將に大涅槃に入り給はむとす。此時、大聖文殊大士、更に法輪を轉ぜむことを請ひしに、佛曰く、

「我れ四十九年、未だ會て一字を説かず、汝何ぞ再び法輪を轉ぜよと道ふや」と、吁、這の一字不説、實に是れ佛が赤裸々なる接化爲人の暖皮肉にして、通身の慈悲落草より出でたる末期の一着子ならざるべからず、徒らに語句の葛藤を逐

一字不説

ふことを止めよ、智解の泥團に奔ること勿れ、這裏の消息こそ佛出世の本懐にして、更に不立文字教外別傳の宗趣ならずや。

#### 二 無舌人の解語

然れども世に魔外の徒なるものありて曰く、佛成道せられて、阿若儒陣如の初法輪轉より、須跋陀羅を最後に説法せらるゝに到るまで實に横説縦説、大小權實の教を垂れ給ひたり、さるを何が故に一字不説なりと云ふやこ。

此の種の疑着を抱くもの甚だ多し、されど斯るが如きは、未だ佛法王法の本面目を知らず、理然として空華の影を捕へ、空谷の響を尋ぬるの痴漢にして、共に我が最尊甚深の佛法を語るべからず、佛の説法は無舌人の解語にして、何ぞ説法不説法の論量に與らむや。今は是れ朕兆已前の説着にして、舊窠の所論にはあら

不來不  
法不  
言不  
說

ざるべし。此の意味に於いて古人も、  
『達磨東土に來らず、二祖西天に往かず』  
と云はれたり、不來不去不言不說、是れ實に佛の眞面目、吾人の實參實學すべき  
本懷亦此處に存す。

### 三 實 參 實 究

支那の大聖孔夫子、亦些子の知見を有せり、曾て曰へり、  
『予言無からむを欲す』  
と、時に子貢疑つて曰く、  
『子若し言はざれば、即ち小子何をか述べむ』  
と。時に孔夫子教へて曰く、

天何を  
かいふ

『天何をか言ふや、四時行はれ、百物生る、天何をか云ふや』  
と。洪川禪師是れを歎じて曰く、

無言の  
言無  
說の

『是れ尼父の眼目なり、吾が瞿曇亦た曰ふ、一字不說と、二聖符節を合するが如  
し。蓋し無言の言、言焉れより大なるは莫し、不說の說、說焉れより妙なるは  
莫し』

と、若し能く此の意に通ぜば、豈に唯だ雨竹雨聲の禪を説くのみならむや、青山  
綠水も亦た無言の轉法輪なることを知るべし、故に道はずや、維摩の默雷の如し  
と、我が禪の本面目、亦た這裏の活消息を實參實究するにあり。

### 四 禪とは何ぞや

禪の  
所  
以  
た  
る

然らば禪とは何ぞや、所謂、禪の禪たる所以は、天地の大公案に參得して、佛  
禪とは何ぞや



性の妙徳を發揮し、之を縦横に受用するにあり、既に禪は天地の大公案なるが故に、溪のせらぎ、山のたゝすまひ、いづれか禪にあらざる、故に古人も、『鳥語蟲聲傳心之訣、花英草色見道之文』

と云へるにあらずや。誠に佛法は沙界に充滿し、天地日月と雖も、亦た禪心の發露にあらざるは無きなり。されば禪は一物として缺くること無く、一事として餘すところ無し。たこへは其の當體は十五夜の満月の如く、明皎々として、圓なり、同なり、大なり、虚なり、虚なるが故に内外の存するなく、大なるが故に際涯なし、同なるが故に差別なく、圓なるが故に始終なし。孤廻々、峭巍々、淨裸々、露堂々として一切處に會て隠るゝことなく、一切時に露はれずと云ふこと無きなり、其の作用に至りては、蒿湯も點じ、茶湯も點じ、行住坐臥悉く禪の妙用ならずんばあらず。

五 解毒圓呑の漢

以上の如く喫茶喫飯も亦た分外の法にあらずと雖も、徒に妄想の皮袋を放出し、壯言大語するが如きは、遂に是れ解毒圓呑の漢、耳口四寸の學なるのみ、如何に縣河の快辯を振ふるも、將た高尚なる論議を爲すも、至道に相應せざれば、蛙鳴鵲噪の何の異なる所あらんや。如何に緻密なる熱思を爲すも、將た幽玄なる研究に委するも、玄旨に相應せざれば、痴情妄想に等しかるべし。

徒に空論空理に奔るは、縦ひ言千金を興ふるも、語半錢に當らず恰も痴猿が水中の月を捕捉せむとするに等しく、何等の所得なかるべし、相變すれば體殊なり、情生すれば智隔り、遂には天地遙かに隔るの愚を學ぶに至るべきなり。多言多慮轉に相應せず、若し錯會して修業力を放擲する時んば、却つた無間地獄に

墮在することあらむ乎。

### 六 古人の修行

斯くの如く佛法を證得するこゝに、甚だ容易の業にあらずとすれば、吾人は如何にして向上の一路を辿るべきか、吾人は其の好個の適例の二三を擧示せむと欲す。

如何にして向上の路を辿るべきか

靜琳禪師、講を棄て、禪を習ふに當り、専心ならむと欲すれども、睡眠の毒蛇屢々堅牢の身心を惑亂す、幸ひ其の境内に懸崖あり、下千仞に臨む。傍らに一樹ありて、樹上より谷下を覗ふべし。師乃ち其の樹上に趺坐し、一心懸念に修行し動もすれば宵月を経たりと云ふ。若し斯く命を軽くし、法を重くするの行持あらば、必ずや大道は通達すべきなり。伊菴の權禪師は功を用ふること間斷なく、晩

に至れば必ず流涕して曰く、

『今日も只麼に空しく過ぐ、未だ知らず來日の工夫如何ん』

こゝ、大衆の中に在りても、無益の一語を交ふること暫くも無かりしと云ふ。日常の工夫夫れ斯くの如く親切ならざるべからず。善導大師は大戒を護持して寸毫も犯さず、四十餘年別の寢處なく、堂に入りて念佛す、寒冷の時雖も必ず汗を流し、氣渴くにあらざれば息まざりしと云ふ。

實に古來の千佛萬祖は、悉く日々の生命を等閑にせず、私に費さざらむと行持せられ、精進勇猛を求むること甚だ切なりしなり。百丈禪師は、

一日不作一日不食

『一日作さざれば、一日食はず』

こゝ仰せられたり。時は得難くして失ひ易し、若し此の身命を等閑にせず、只管に大道の爲めに放身捨命する時んば、必ずや無價の珍寶を得るに難からざらべし。

七 禪の三根

更に吾人は修養の實踐を顧慮し、左の三要を勸む。一には大信根、二には大憤志、三には大疑情これなり。信根の第一は自己を信するにあり、即ち自己本來是れ佛なることを信するなり。大憤志とは道を求むるに旺んなるなり。所謂身心堅固にして、獅子奮迅の志氣の猛烈なるあれば、水火尙ほ侵すこと難かるべし。大疑情は天地の公案、宇宙の謎に向ひて大疑團を發し、專一に工夫するなり。大斯く三要素を以て、着々精進することあらば、必ず參禪其の功を奏するや疑なく、遂には佛心と我と一致圓通し、唯證相應し去るべきなり。爰に於いて初めて自己の通身是れ佛作佛行なるを以て、起居動靜悉く佛法の閑話々たることを知り、徒らに舌頭を弄して色空理事を論ずるは、終に是れ鬼窟裡の死漢たるを

免れざるを覺ゆるに至らむ。吁、人間に佛出世し、心中に物現成す、刹中の佛は身を藏して影を露はし、佛中の刹は形を現じて朕なし、若し這裏に投入して吞盡吐盡するが如くんば、始めて末後の一着子たる、眞個の佛陀に相見し、以て大涅槃の安心を獲得せらるべきなり。

白刃頭上に臨むも驚かず

一 天下の大勇者

古人の語に『膽は大ならむを欲し、心は小ならむを欲す。智は圓ならむを欲し行は方ならむを欲す』と云ふ言葉がある。是れは我等軍人に取りては勿論、一

天下の大勇者

白刃頭上に臨むも驚かず

1103

般の人士に取りても、處世上實に千古の格言に信ずる。「膽は大ならんを欲す」此は志氣の堅牢不拔なることで、所謂八風吹けども動ぜず天邊の月と云つたやうな、些々たる刺戟に依りて、ビク／＼せぬやうな大丈夫兒でなければならぬと云ふ意味である。東坡居士が「天下に大勇者あり、卒然之に臨むも驚かず、故なくして之に加ふるも怒らず、此れ其の挾持する所の者甚だ大にして、其の志甚だ遠ければなり」云つた通り、眞の大丈夫兒は平常一寸見ただけでは如何にも臆病のやうであるが、いざ鎌倉と云ふ場合には大勇があるものである。然るに兎もすれば大功は細謹を顧みずなどと云つて、日本人の豪傑風にして、日常の行動に深い注意を拂はぬやうな風習がある。此の風習がやゝもすれば大政治家や大事業家云ふべき人をして、内行の紊亂を來さしむるやうなことがある。人と云ふものは、種々の方面に向つて義務を盡さねばならぬ。國家の一員としては國家

的大義を守り、社會の一人としては社會的義務を全うし、家族の一人としては家族的義務を盡さねばならぬ。斯く各方面に對して、相當の義務を完全に盡すと云ふことは、中々容易のことでは無い、動もすれば此方が立てば彼方が立たぬといふ様な矛盾が生じて來る。此の場合に於ける態度こそ、最も慎重な注意を拂はねばならぬ。これには自信力が強くなければならぬ。縦ひ火の中水の底にても、場合に依つては身を投じて、誓て我が志を曲げない云ふ自信である。此處に大なる勇氣が出て來る。「心は小ならんを欲す」此は即ち是れを云つたものである。

## 二 青島戰の實感

昔、源の頼光の部下に四天王と稱せられた豪傑があつた。其の内一人である坂田の金時は、最も豪邁にして智勇共に卓絶して居た。或る時これも四天王の

白刃頭上に臨むも驚かず

三六

一人である涉邊綱が金時に向ひ、「昔殿は如何にして大勇を養はれしや」と問ひしに、彼れの挨拶が頗る面白い。乃ち「拙者は常に臆病の稽古をしてその勇氣を養へり」と答へたさうである。金時の云つた臆病の稽古とは、彼の風聲鶴唳に驚くが如きここを意味したものではない。所謂慎み深くして一言一行をも苟くせず、事に望んで大勇を發することを云つたものに相違ない。此の臆病の修養は一般の人士にも必要であるが、殊に我等軍人には最も肝要である。軍人にありては一旦事ある時には國家の爲めに千軍萬馬の巷に立つて生死を賭して闘はなければならぬ。此の場合に臨んで最も大切なるは如何なる場合に處しても愛國の精神の一片となり、砲彈雨下の中に立ちて自若として軍人精神を發揮して退かぬことである。

生も死も打ち出す砲の煙なり

たつかと見れば跡方もなし

これは自分が嘗て青島戦に赴いて居た時の拙詠である。青島戦と云ふことで思ひ出したのは、巫山の戦争の際名譽の戦死を遂げた一兵卒の身の上である。巫山の戦争の際、嘗て佐賀聯隊から自分の部隊に参加した一兵卒が行方不明になつた。部下の搜索隊の報告に據れば、其の兵士は常々臆病の性質であつたから、捕虜になつたか、或は脱走したか、何れにしても戦死したのではあるまいと云ふ事であつた。然し自分は平常彼れの行状を知つて居たから、密かに期する所があつた必ず戦死したに相違ないと思ひ、自分が先きに立つて更に搜索したところが、巖と巖との間に挟まつて、果して戦死して居るのを發見したのである。其の死顔を見ると少しも苦悶した模様もなく、敵弾に中たり絶命の時萬歳を叫んで死だものらしく見えたので、自分も非常に満足し、若し此の遺骸が見付からなかつたら、

現代人の  
陥陥

天晴れな戦死をしながら闇から闇に葬られて、脱走だの捕虜だのになつたと云はれて、行方不明で終らなければならなかつたのに、死屍の発見されたことを喜ぶと同時に、益々平常の修養の大切なることが感じられた。自分は幸にも参禅の効果によつて、及ばずながらも心に動搖なく、小心翼翼ながらも、志操の獨立を失はぬのは、禪が與つて力があると思ふ。

自分が斯く婆言を敢て費すと云ふのは、軍人で云へば近來の軍人は兎角文弱に流れて、軍人精神の活氣を缺き、青年で云へば現代の青年は個人主義に趨りて自己の修養を缺き、多少氣概ある者と思へば、それは唯だ放膽的方面にのみ思想を傾けんとする所から、一頓挫に逢へば忽ち勇氣を喪失し、一蹉跌に逢へば忽ち自暴自棄に陥るやうなことが多い。眞に能く自己の修養を積み、恰も大象の地を踏むが如く、一步一步に十分力が這入るから、自づこ心の修養も積み、些々たる

物事に動着せず、遂に白刃頭上に臨むもビクともせぬ大勇を發することが出来る。

現代の青年子女と其指導者

一 喜ぶべき傾向

禪の  
流行

近來は禪の流行も稱すべきものか、何處へ行つても参禅者の二名や三名を見ぬ處はない。これは誠に結構な事で、斯く一般の國民思想が宗教的方面に注意するやうな傾向の見ゆるのは、國民が眞面目になつた事を表するものであると思ふ。私も時々日置禪師や其他の禪界の宗將と一所に各所の演説會であるとか、又は講習會であるとかに招かれて行つて講演するが、此の種の會も寺院などで開かるゝ

ことは殆どなく、多くは學校とか議事堂、乃至、公會堂などに於て開かるゝ場合が多い、随つて聴衆も主に中學、師範、高等女學等の青年子女、其地方の學者、實業家、法律家や教育家、軍人等の知識階級の人が多い、斯く時代思潮の變遷とは云ひながら、眞面目に宗教上の話を聴くやうになつたことは、頗る面白い現象であると思ふ。是れまでの宗教は何れかと云へば爺さん婆さん主義の説教にして世の中の餘り物が家に居ても邪魔扱される故、お寺詣りでもしよう、と云ふやうな老人のみに依つて聽かれた傾きがあつた。然るに此頃は漸く有知識階級の人々から熱心に研究され、殊に青年子女の間に宗教が迎へらるゝやうな傾向の見えて來たことは、頗る痛快なことである。

## 二 現代教育法の缺陷

現今の  
教育の  
弊害

然し吾人をして忌憚なく云はしむれば、今日の青年は、概して文弱に流れて居る。すべてのやり方が兎角く面白臭い。是れは即ち現今の教育の弊害であつて、忽にすべからざる問題である。今の教育は餘りに機械的である。鑄形に詰め込みさへすれば夫れで宜しいと云ふ風な教育法であつて、何等精神修養の根柢なつて居ない。故に學校に居る時は可なりの成績を占めて居た者でも、一度社會の激浪に遇へば忽ち狼狽して方向を失ひ、其の波浪に押し流され再び立つことが出來ぬやうな者が多い。意氣地ないと云はうか、薄志弱行である云はうか、此の點に至れば誠に帝國の前途を悲觀せざるを得なくなる。其の弊今の青年は成功を急ぎ、大器晩成の大度量が無い。たゞ此の學校を卒業すれば何圓になる、彼の學校は幾圓にしかならぬなど、すべてが打算的である。かゝる頭で文字を學んだとて、それが人格の修養上如何ばかりの扶にならうか。その結果、學問を飯食ひ

學問を  
飯の種

現代の青年子女と其指導者

三二

道具と心得て居る輩が多い。而して漫りに名聞利養のみに汲々として自己の脚下をお留守にして居る。尤も誤解してはならぬことは、何も名譽を求めようとするのが悪いと云ふのではない。これも世界の上に於て人物を發展させ、國を強固ならしむる一大要素となるのであるから、必要には相違ないが、たゞ名譽にのみ囚へられてはならぬ。學生がお白粉顔をして、利欲に耽るなどは、實に教育の弊害も極まれりと云ふべしである。

### 三 殺活自在の機用

是れは畢竟學生を指導する任に當る今日の教育家なるものが、殺活自在の劍の用ひ方を知らぬからである。歐洲大戦争の結果、漸く日本國民の自覺を促し、青年子女の如きも精神修養に心を向けて來た今日教育家も宗教家も自ら責任を以て

教育家  
に對す  
希望

殺活自  
在の機  
用

一段の注意を拂つて指導の任に當つて貰ひたい。また吾人は精神の修養するかと云て、青年子女に對し必ずしも佛教を信仰せよとは云はぬ、また禪を修行せよとも云はぬ。たゞ心身を惜まぬ大勇猛心があつて、自己の氣力を充分に養つて貰ひたい。禪の言葉に殺活自在の機用と云ふことがある。家庭に於てもまた此の言葉を用いて貰ひたい。單に進むことを知つて退くことを知らぬは血氣の勇であるたとへば小供であるならば、朝學校へ行くのは、嫌であると云ふのを父は殺人刀を振りあげて叱り飛ばす、側に母は活人劍の涙で丁寧に教へてやる。この殺活自在の妙機が具つて初めて完全なる子孫の教育が出来る。是れを國で云へば戦争である。百萬の大敵をも只一撃と云ふ風に大砲やら小銃やら、拔けば玉散る氷の如き名刀を提げて戰場に臨む、實に殺伐極まる有様であるが、直ちに其後から赤字社がついて彼我敵味方の差別なく、負傷者を看護してやる様は、實に地獄と極

殺活自在の機用

三三



樂、鬼と佛の如きものである。併し此の二つがあつて初めて完全に成るので、禪門に殺人刀活人劍の妙用のあるのも、畢竟するに此の意味に外ならない。要するに宗教家も教育家も、單に出世間門の事にのみ執着して、少しも世間門を知らぬやうでは、教壇に立つて人心を導くとは出来ぬ。今日の教育家も宗教家も共に社會の實情に疎いために、勞して功が少いので、それで社會からは兎角く無用の長物あしらひを受ける傾向がある。自ら塵中に入つて衆生を度す、殺活の二劍を自在に使用し得るやう修養するのが、僧俗を論せず、現代に於ける緊急なる問題ではなからうか。

## 佛教と實社會との交渉

### 一 爲政者と佛教徒の自覺

明治維新以來日本が東洋思想の精華たる佛教を閑却し、西洋の物質文明に心酔したる結果、今日現に吾人が見る如き腐敗墮落せる社會を構成するに至つた。是れは吾人が今更事新しく論及せんでも、日々の新聞の三面記事を見ても立證されるに相違ない、斯る結果を見るに至つた原因は、一は明治以來の爲政者の失策、一は日本國民指導の任にありし佛教徒の因襲的なりし事に歸因する。乃ち爲政者が行政の方針に於て唯先進國の文明を模倣しさへすれば能いと誤認し、すべて歐米百般の文物制度を輸入して、日本固有の國民性の培養を閑却せるが一の原因で

社會の  
腐敗の  
原因

ある。次には我が國民性を薰陶し、鑄造し來りし佛教徒が、精神的威力を失却して、因循姑息にも國民思想の趨向する所を等閑視せることも確かに一原因を成して居る。

然るに歐洲大戰亂の結果、爲政者も漸く迷夢より醒め、西洋文明が眞の理想的文明にあらざる事を自覺して、段々佛教徒と接觸し、同一歩調の下に國民思想を改善し、振作せんとする態度が見えて來た。維新以來毀損し蕩盡したる國家社會の紛亂救ふべからざる今日、漸く救護を絶叫せんとするが如きは、實に遲八刻の恨みなき能はず。雖も、遅いながらも自覺し來りたるは兎に角く歡喜すべきである。佛教徒も今や刻々危険に瀕しつつある日本現時の思想界の紛亂に際しては、今や一宗一派に立て籠れる蝸牛角上の争鬪を止め、佛教の社會的活用に重きを置き、日本帝國の病弊に應じて醫藥を施し、以て日本帝國を永久に安固ならしめねばならぬ。

## 二 下化衆生の本旨に歸れ

前述の如く佛教が社會の人心統一の爲めに必須缺くべからざることを當路者も感知し、一般社會も此點に注意を拂ひ、進んで佛教徒を迎ふるやうに成つて來たことは事實であるが、一方佛教家は如何と云ふに、人根に應じて自在の接化手段を用ゐるに公言しつつ、依然として因襲的習慣を嚴守して何等刷新する處が無い一例を擧ぐれば釋尊出世の前後に於ては、科學の如き全く幼稚の時代であつたから、釋尊は人根の利鈍に應じて自由無碍の比譬を引用して說法せられた。地獄極樂等の説の如きも、當時一の手段方便として説示せられたものに過ぎないと思ふ。

然るに今日の世界は如何と云ふに、科學の如きも著しく進歩發達し、飛行機はあり、無線電話はあり、潛行艇はある文明の世界となつた。夫れに準じて經文の解釋應用の如きも、努めて時代に適應するやうに工夫せねばならぬのに、依然として昔のままの説を用ゐて居るやうな有様である。社會が進歩すれば進歩する程智識の程度は進み、道德宗教は夫れと反比例に退歩して行く傾向を有するものであると云ふが、此の點からでも吾人は一段と佛教徒と自覺を促したいものである。

### 三 時代思潮に適應せる布教

の佛  
誤家  
解

尤も此處に注意を要するは、佛教を奉ずる人々の中には、單に佛教は出世間的にのみ用を爲すものと誤解して居るものがあることである。斯の如きは佛教の一

活釋  
說尊  
法の

面を知りて、更に他の一面を知らざるものと云はねばならぬ。釋尊も體用の二相を説かれたるが如く、立派な物件ありても、それが實地の活用をなすことで無ければ、寧ろ無きに如かずである。釋尊は六年の正思惟に依り、明星を一眼するに及んで、悟道の勝躑があつた。若し其の眞理が出世間のみ必要なものであるならば、下化衆生の權方便たる五時八教の普説は無かつたに相違ない。然るに往く處として説かざる無く、來るものとして教へざる無き横説縦説の四十九年の玄談は、悉く是れ實社會に向つての活説法であつた。されば時代を距ること三千年の今日と雖も、釋尊の本懷たる傳法救迷情の眞精神を體認し、時代思潮に適應して、能く一般社會を教化して行く手段方法を講じて行くのが、佛教徒としての緊急なる任務であるまいか。然し此處に誤解してはならぬ事は、一方時代思潮に適應して布教方策を立てねばならぬが、一方では又何處までも釋尊の精神を

徹底的に守ることゝ忘れてはならぬことである。即ち佛教の生命たる戒律は確實に守り、物質萬能の時代に向つて信仰心を植ゑ付けることは最も大切である。實社會と接觸したからと云つて、其れが爲めに俗化してはならぬ。形に於ては矢張り僧衣を纏ひ、夜間に一眼見ても嚴然と僧侶たることが明瞭するやうに、其の僧形を正しくし、心の莊嚴を現すと云ふが如き點は、墮落せる今日の宗教を一掃するには最も必要なる手段である。

#### 四 授戒會と佛教護國團

吾人は現時佛教を實社會に結びつくる手段の最大捷徑として、各地に開かるゝ授戒會と、各地の佛教護國團との提携を希望するものである。各地に開かるゝ授戒會は今日までは知識階級の比較的低き所謂爺さん婆さんの分際を中心として施

設せられ、今後も猶ほ此の方針の下に行はるゝやうでは、久しからずして社會より無用視せられ、聽ては廢滅するに到るやも圖られぬ。

各宗が授戒會を催す場合には、其の宗派の管長、乃至有力なる宗匠が臨場する故、其の機會を利用し、各地の佛教護國團が主催となりて講話會を催し、知事或は學校長等の有知識階級の人々、且つは授戒會に臨める知識諸氏も出席し、出來るならば更に他の名士をも招き、以つて授戒會を有意味に應用したならば前述の爺さん婆さんに限らず知識階級の人々も次第に反響を與へらるゝやうになると思ふ。現に此頃山形市の佛教護國團が主催となり、知事市長聯隊長等を初め、其地方の知識階級の人々が縣會議事堂に集つて講話會を開いた。夫れは恰も曹洞宗日置禪師が龍門寺の授戒會に應化あり。秋野曹洞宗大學長が偶々同地方を巡化せるを利用して開催されたものであつたが、自分も其の席に招かれて一場の講話を

試みた次第である。山形市民諸氏は此の好機を得たる事を大に歡んで居たやうであつたが、他の地方に於ても何の宗派たるを問はず、佛教護國團が主催となり、斯る機會を利用して、此の種の計畫を立てたならば、佛教と實社會と結合するに最も好い方法であらうと思ふ。

物質文明に惑溺せる結果、今や日本は救ふべからざる社會状態に陥れる際、如何なる方面よりも救済して行かねばならぬ急務に際會し現代の佛教徒として容易に遂行し得る佛教を實社會に活用する一方法を述べて見た。最後に自分は此のことを各宗の諸氏と計りて全國に普及せむことを希望して止まぬものである。

## 禪より見たる水野内相

### 一 予の後藤大臣觀

嘗て交詢社に於て新大臣の招待會が催されたが、其の席上で後藤外務大臣が、『予はお經を知らない和尚がお寺を持つたやうなものである』又水野君は『萬卷のお經を讀んで迷つて居る納所坊主である』と云はれたが、此の言葉は用意か不用意か知らぬが、禪的に二人の寫眞であると思ふ。之れを禪的に解釋して行けば、此の二人の人物は明瞭に了解されるであらう。

後藤外務大臣はお經を讀む事は出来なくとも、唯我獨尊の大達觀を持つて居るそれが當るか當らぬかは實行して見なければ分らぬ事だが兎に角此の大達觀を持

つて居る者は、お経などは読む必要がない。釋尊の前には、大藏經もなかつた、法華經も三部經もなかつたのである。然し唯我獨尊的の大根機、即ち宇宙の大なる自然活機はあつたのだ。それ故に經は讀めなくとも、大達觀者は大活機を捕へる事が出来る。後藤大臣は經を知らずに木魚ばかりポク／＼と叩いて居るが、其の音は即ち宇宙大活動の音である。地球も太陽も月も木魚である。宇宙間の萬物凡て木魚ならざるは無いのである。

此の要領で外交をやれば、露西亞も亞米利加も木魚にして、無經の經で、ポク／＼叩き上げるであらう。是れが後藤大臣の今日迄のやり口であるが、又今後も此の無經主義で貫徹されるであらうと思ふ。其處に該大臣の生命がある云つても好からう。

無經主義

二 勇氣ある内相

水野内務大臣は自分から云はれた通り、物質上に於いても、又精神上に於てもあらゆる研究を積まれた人で、内務の行政上の經歷及び知識に於ては、該大臣の右に出づるものは無いであらう。就中、我輩、吾世人の水野大臣に最も敬服する所は、萬卷の經を讀んで迷つて居られる點にあるのだ。人間は元來生れるから死ぬまで終始迷つて居るものである。此の迷ひは時々刻々、之れを小にすれば家庭問題、之れに大にすれば國家問題、さては世界の形勢等に關して生じて来る。只に印刷した經文が我々を迷はすのみではない、ありとあらゆる事々物々が皆我々の迷ひを引き起すのである。其の大なる迷ひをば毅然として切り脱けて行く勇氣ある者が、大達觀者である。金剛力を持つた人である。釋迦も迷つて雪深い山

大達觀者

禪より見たる水野内相

三三六

中に六年の星霜を送つた。又達磨大師も九年の歲月を壁に向つて瞑坐して居つたのである。水野大臣は農商務省の官吏となつて以來今日に至るまで、此の金剛的迷ひを以て一貫し來つたのである。聊かも政黨政派に關係せず、自分の信する所を毅然として貫徹したのであるが、其の意士の鞏固なる事、又思想の實に國家的なる事、自分の信する所を飽くまで斷行する其の鬱勃たる勇氣は、常には胸底に深く沈積されて居るが、事ある時に當つて、この宇宙の大活機と一致して勃發するのである。勇氣ある事は吾人の常に見る所である。是等の金剛力の湧出する源は、萬卷の經を讀んで迷ひ込んだ道の兩側からである。

畢竟小さく迷つて居るものは小さい道さへも通れぬ事がある。是れに反して萬卷の經を讀んで大きく迷つて居るものは、世界的大道に迷ひ込むのであるから、行く所として我が前途を遮ぎる障礙物がない。世人は益々水野大臣の如き金剛力を抱いて迷ふ者の國家の爲めに勇猛精進、帝國をして泰山の安きに置かんことを切望して止まぬものである。

## 日本唯一の佛舍利奉安塔

### 一 舍利塔の落慶式

大正七年六月十五日に名古屋覺王山に於て佛舍利奉安塔の落慶式が舉行された該奉安塔は日本唯一の佛骨を奉安せしものにして、日本帝國と佛教との千三百年來の關係を大正の御代に於て確實に結び付けたる一の象徴であるを信する。此の佛骨は明治三十三年に暹羅皇室より日本の佛教各宗に分與されたものにして時の稻垣暹羅公使が立會ひの上、東本願寺法主大谷光演師を正使とし、日置默

日本唯一の佛舍利奉安塔

仙禪師外數師を副使とし、南條文雄博士が隨行長となつて暹羅國に派遣され、夫れを受領して我が國に將來したものであることは一般に知るところである。

斯くて内務省と特別なる交渉を重ね、各宗協同一致して、佛敎の何宗にも偏せず、直ちに釋尊出世の本懷に歸ると云ふ本旨の下に、一箇寺に創立して佛骨を奉安することになつた。夫れが今日の名古屋市外東山なる覺王山日遷寺である。此土地は元來山川相俟ち、幽邃なる靈地にして、佛骨を安置するには最も適應して居る。初め日置黙仙禪師が正住職となり、天台宗中村勝契師が副住職であつたが、日置禪師が曹洞宗永平寺貫首に晉まるゝや、後を襲うて中村氏が正住職となり、上田祥山師が副住職に推擧されて現在に及んでゐる。

覺王山日遷寺

二 日置禪師の大導師

今回竣工工せる奉安塔は、二十餘萬圓の寄附契約成立し、大正四年三月より莊嚴なる該塔の工事を起し、伊東忠太博士がガンダーラ式を設計し、信州三留野産の石材を以て志水請負人の手に依りて造り上げられ、之が今回全く竣工したのである。猶ほ附屬建築物たる鎌倉式の禮拜殿及び通用門は伊藤平左衛門氏の手に依りて之れ亦竣工した。當日は當日の正使大谷光演師が疾病の爲め、副使たりし日置禪師が代りて主催となり、落慶記念大法要を嚴修せられたのである。此日は直言宗高野派管長密門宥範師、天台宗座主不二門智光師其他各宗の管長或は其の代理者出席し、柴田宗教局長外參拜者無慮四五萬に達し、近來に無き盛儀であつた。自分は日本に於ける唯一の靈塔の盛大なる竣工法會に參列することを得たるは、實に終身忘るべからざる記念である。即ち今日まで種々なる出來事に遭遇したる内にて、一種特別の靈精なるインスピレーションに打たれたる終身忘る

日置禪師の大導師



べからざる記念である。ミ確信する。それで少しく當日の所感と實際の状況とを記して、這の盛儀に參せざる日本全國の諸士に報けたいと思ふ。

### 三 宇宙の大活機

佛骨を暹羅皇室より分與せられたるは、今より十七年前であるにも拘らず、當時此事に與りし稻垣公使などは既に幽明境を殊にし、其他の諸師も或は死し、或は病氣にて正副兩使の内にて當日の盛儀に參與することが出来たるは、唯一の日置禪師のみなりしことは實に人生の無常を示したるものであると思ふ。自分は當日置禪師の依頼に依りて、稻垣公使が佛骨を受領する際に検査せしと云ふ任務を、同公使に代りて奉安塔に安置するに就て、親しく検査しつゝ納めることになつたのは、誠に奇しき因縁であると第一に感じた。次には佛骨を納めたる純金の

奇しき  
因縁

小塔（六七寸の高さ）は、暹羅公使より寄贈されたるもので其の小塔の中に佛舍利が納められて日本に傳へられたものである。それを今回は其儘奉安塔の中に納めたのである。此の純金の小塔中の佛骨を御簾の中より日置禪師が移し參らせたる時に、各宗管長は威儀を正して禮拜し、自分も同時に是れを拜したる刹那の感想は次の如くであつた。たゞ一片の佛骨に過ぎないが、此の一片の佛骨が、三千年來世界に其の威光を發揮し、功德を流布して、拔苦與樂、衆生濟度の力を宇宙大活機と共に間斷なく大活現成せしめて居る其の偉大なる大救世主釋尊の遺骨の一片であると云ふことを考へたる時には、釋尊の偉大なる靈體を聯想し、其の威光に打たれ何とも云へぬ無限の法悦を感じ、同時に今や世界はすべて私利我欲の爲めに大動亂を起し、八熱地獄の艱苦を嘗めつゝある列國の中に、獨り超然として我が日本帝國が上下泰平克復して、然かも世界の平和の大聖たる釋尊の人

格は、本國印度に於ては其の墳墓すら發かれて居ると云ふ悲惨の狀態にあるにも拘らず、其の靈骨を我が日本帝國に奉安するに到つたと云ふことは日本帝國國體の偉大無比なることを證明すると同時に、佛骨が日本に將來されたことと相待ちて、帝國の使命、佛教の使命の大和民族に二者一體として迎へらるゝ時代の來りしことを感せずには居られなかつた。釋尊は印度に降誕せられた。但し其れは且らく釋尊の形骸だけである。人格としての釋尊は、三千年の昔八十歳を以て形骸は消滅して居られるけれども、其の精靈は三千年の今日猶ほ潑刺として活潑々地に大日本帝國に現成して居る。是れは世界の今日の大騷亂を根本的に平和に導き、將來世界の民族を根本的に安靜に自由に棲息せしむる指導の大任を負ふのは日本帝國であると云ふ意味が、此の佛骨の奉安に依つて明かに有識者に見えてあらう。換言すれば釋尊は三千年の前に印度に人格として消滅し、靈聖として

釋尊の  
精靈

しては我が大日本帝國に生れられたと云つても宜しい。

#### 四 日の本の光

斯くの如き意味から此の奉安塔の落慶式を考ふれば、我等大和民族は佛教徒と帝國との關係の天然の結合を感ぜずには居られぬ。此の感じは日置禪師も自分も期せずして同一であつたことは、次の日置禪師の香語と自分の拙詠に依つても解るのである。日置禪師の香語に曰く。

凌駕伽耶古道場。

黄金塔聳現東方。

扶桑日與暹羅月。

長照三人天大覺王。

自分の所感としての拙詠は、

大君の御稜威は彌よかどやきぬ

日本唯一の佛舍利奉安塔

佛も此處に日の本の天

三四

更に自分は左の句をものした。

光無邊靈骨高し雲の峰

以上の如き有様であつて、我等は大日本帝國が此の大戦亂後に於て、世界に處するに、佛敎との關係の密なること、又宗教家は勿論帝國の使命を全うすることに努力せねばならぬと感じた次第である。此の偉大なる出來事が全國に周ねく傳はらざるを遺憾として、些か鳴々嗽々述べて見た次第である。

### 先づ腹を鍊れ終

(藤田)

大正十五年三月八日印刷  
大正十五年三月十日發行

先づ腹を鍊れ 奥附

定價金壹圓參拾錢

不許  
複製

著者  
發行者兼  
印刷所

堀内文次郎  
高倉嘉夫  
忠誠堂印刷所

發行所

東京市神田區今川小路二丁目十四番地  
電話 四三〇八  
東京市神田區今川小路二丁目十四番地  
電話 四三〇八

忠誠堂

伊藤痴遊著

三五判洋布裝金文字入上製

# 快傑傳

第一編 六百六十頁  
 第二編 六百八十頁 定册 一圓五十錢  
 第三編 六百四十頁 [價  
 第四編 六百二十頁 送料各十錢

本書收むる處は維新前後の人物、必らずしも第一流のみ云へぬが何所か他人の模倣を許さぬ特色を具へた人傑を網羅し其人々の傳記、逸事を叙録して世人が坐臥の閑讀に資し兼れて青年者流の志氣を鼓舞せんとするもの、一讀懦夫を起たしめ劣夫を愧ぢしむる底の趣きがあると同時に又讀者は正史の上で見ることの出来ない個人の奇行や珍談をも知るの面白味があつて家庭に於て父母の前にて之を讀むも、兒孫の前にて之を讀み聽かしむるも決して面を赤むるが如き醜陋の記事なく世間幾多快傑の人格長所を窺ふことを得らるゝ云ふ一般人士に最も裨益ある讀物である、敢て机上に一木を備へんことを希望する。

伊藤痴遊著

# 西郷南洲

三五判洋布裝金文字入上製函入

定價前編 九百四十頁 一圓七十錢 中編 九百四十頁 後編 七百十頁 送料各册十二錢

國南の一書生より起ち風雲の勢に乗じて回天の偉業を遂げ身は遂に城山の自刃に終焉を告げしと雖も其英名は長へに燦として不滅の光輝を青史に放ち曠古の英雄也人世の師表也と世を擧げてその高風雄姿を欣仰尊崇せしむるもの之を西郷南洲翁とす本書は翁の波瀾曲折なる眞生涯を伊藤痴遊先生により縦横に寫し出されしものにして在來の南洲傳とは大に類を異にし一讀維新當時の壯烈を眼前に睹るの趣味あるのみならず平凡を化して偉大に懦弱を轉じて崇高ならしむる絶好刺激を得るに共に併せて幕末側面史を知り又維新史を味ふの便益あるものなり苟も偉人の芳聞を踏んで眞魄を修養せんとする者に敢て一讀を推奨す

伊藤痴遊著

# 巨星

## 亨

三五判洋布装  
八百二十餘頁函入  
定價 二圓三十錢  
送費十二錢

星亨は我政黨史上逸すべからざる英雄的政治家である常に反對黨に包圍せられあらゆる譏誣を一身に受けつゝ尙且一代の風雲を捲起し而も兇漢の爲めに倒れた其生涯の遺り口に於てはアルタスの手に掛つて倒れた羅馬の主宰者シーザルに頗る酷似して居る云はれて居るだけに星の政治的生涯ほど波瀾の多いものは稀である、本書は知遇淺からざりし痴遊先生によりて其短所と長所とを忌憚なく叙せられしものであつて我政黨の一半を知らんとする者及今後政界に乗り出さんとする者の良参考書である

伊藤痴遊著

# 吉田松陰

菊判 裁判三百頁  
總クローリス製  
定價 一圓三十錢  
送費 八錢

維新回天の鴻業は憂國慨世氣魄凛々たる幾百志士の熱血に依つて創めて之を見るを得たり就中吉田松陰先生の如きは博學多才夙に氣節を尙み一世の爛眼早く時勢を透見して己自ら國難に當りしのみならず居常有爲の青年を膝下に集めて之を薰陶感化し以て其志氣を鼓舞作興し他日國家の爲め貢獻せしむる所あらんことを期したる實に志士の巨擘にして又近代日本の産める精神主義の一大人格者なりといふべし先生の如き精靈的人物の出現を必須とする大正現代の青年讀書子に致して一讀を推奨する。

前桃山御陵々々監  
前學習院教授 陸軍歩兵少佐 猪谷不美男著

賜天覽

乃木大將 大遺訓

三五判洋布裝  
四百十頁製函入  
定價金一圓五十錢  
送費八錢

忠烈至誠の神人乃木大將生前の言行を大將に多年親炙せる著者が雄渾なる筆を以て叙述せられしものにて他に模し得ざる特色を有し、一讀將軍の崇高なる英姿を夢歸せしむ。大將の一生は今後年を経ると共に後世にまで益々追慕の念を深からしめ實物上の教育として種々なる場合に將軍の言動を實例として模範とすること亦た多からんと信す。特に巻頭に掲げたる將軍の肖像並に筆蹟は本文と相俟つて忘れ難き好印象を興ふるものなり。

村上浪六著 ▲新刊▼

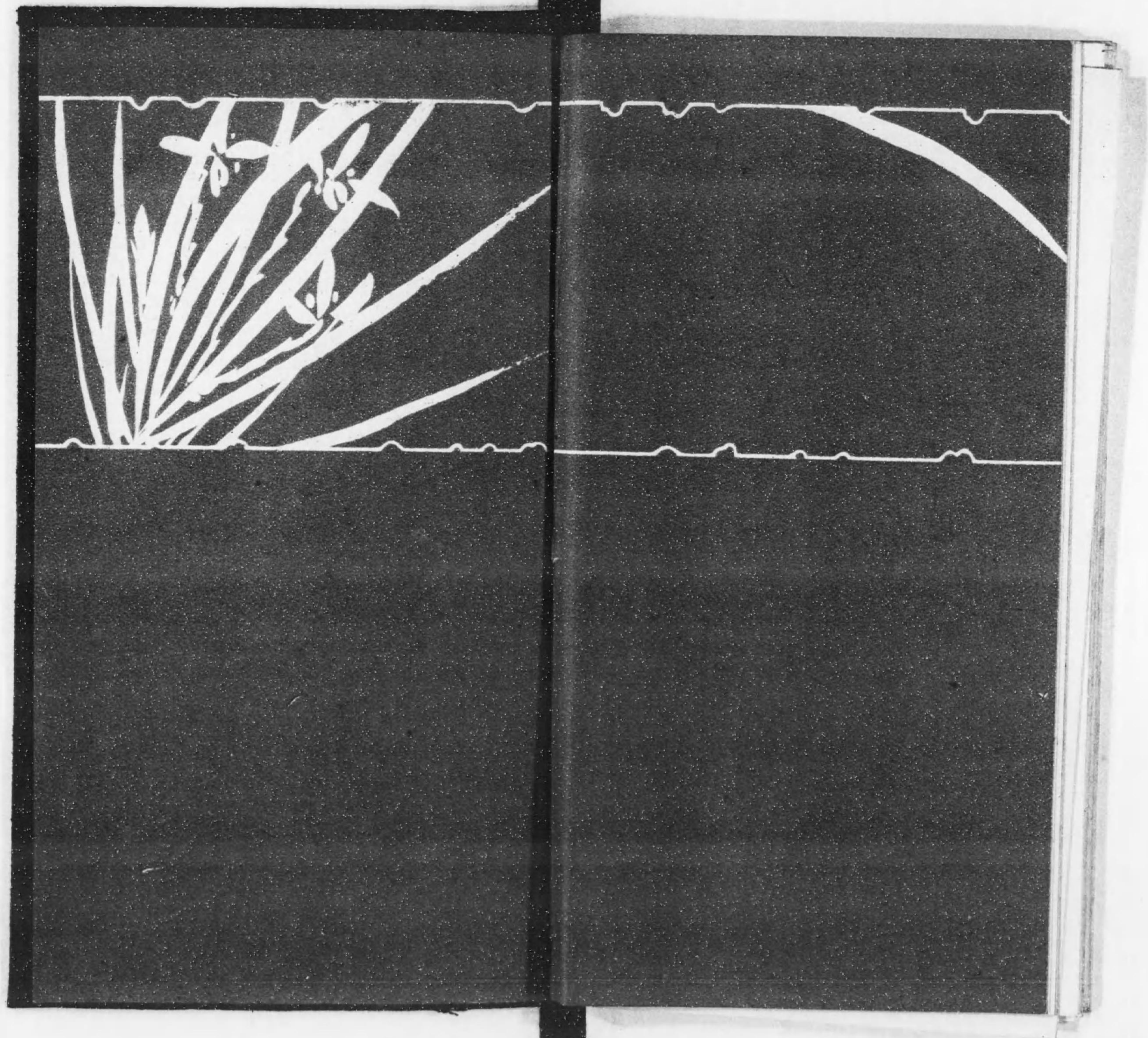
人生の裏面

三五判二八〇頁裝幀美函入  
定價金一圓二十錢  
送料八錢

裏に裏あり、底に底ある人生の裏面は世の中の酸いも甘いも噛み分けたる苦勞人にあらすんば遠親するを得ず、村上浪六先生、奇骨の眼、皮肉の筆、人間世界の奥秘を開いて、讀者をアツと驚かしむるの間、處世の機微を暗示して痛快骨に徹す。『人生の機微を洞察し痛快と皮肉滑稽とを一丸とし、縦横自在に人物を活殺するのが浪六の筆である』と評した讀賣子の言は眞に讀者を首肯せしめん左の目次を御覽遊ばせ。

目	器	落伍者	わからずや	成功者	わがり屋	空論家	いたづら者	浮氣者
こぼし屋	嘘つき屋	お世辭屋	ぶうく屋	冷血漢	男	三	人	女
其他	數章							







終